

# メールマガジン漂流記

(オンライン版)

『MyBook』の3年間

筑井信明 著



## 目次

はじめに .....	4
1年目 (1999年5月～2000年4月) .....	9
2年目 (2000年5月～2001年4月) .....	61
3年目 (2001年5月～2002年4月) .....	113
最後にひとこと 「本の風景社」の1年間 .....	177

## はじめに

二十世紀の伝説になったケネディ大統領暗殺事件が起きたのは一九六三年十一月、いまから三十九年前のことです。当時中学生だった私はその直後に映画館で『稲妻の二年十か月』というニュース映画を観た記憶があります。ケネディ大統領の活躍を記録したもので、テレビが普及するまで劇映画の合間には必ずこうした「ニュース」が上映されていたものです。ところで、なぜか今まで私はこのタイトルを『稲妻の二年七か月』と記憶していたのですが、就任期間から考えると、おそらく「二年十か月」だったはず。こうした思い違いや記憶ミスは必ずあるようで、こんな小さなことから考えても「歴史の真実」がいかにあやふやなものかがわかります。

などとおおげさなことをいつていますが、私がメールマガジン『週刊MyBook』を始めたのが一九九九年の四月。とすると、今月で『二年七か月』になる——これはあの記録映画と同じだと考えて、編集後記をまとめてみようと思ったのが昨年の十一月。これが本書の出発点になったというだけの話です。

それではメールマガジン「MyBook」を始めようと思ったそもそもの動機はというと、これがたった三年ちょっと前のことなのにはつきり思い出せません。ただし、直接のきっかけが間違いない。当時ブームになりかけていた「メールマガジン」なるものを見てみたいという私の単純な思いにあったことは確かで、その三年前の一九九六年に私は有志に呼びかけてインターネット上に「自費出版ホームページ」を開設していますから、基本的に新し

いものが好きなんです。このホームページは、その後「自費出版ネットワーク」の結成に結びつきますし、もちろん現在も運営を続けています。しかし、やってみるとわかりませんが、ホームページの運営というのは資料室をこつこつと建て変えているみたいな地味な作業で、よく言われる「情報の発信！」みたいは感じは意外になく、言い換えると最初の意気込み（やりがい）を維持するのが難しい媒体ではありません。

対して「メールマガジン」は雑誌という名称がついているように一種のジャーナリズムで、メディアとしての性格が明快です。さらに、定期的な発行とか購読者管理とか難しい問題はありませんが、毎回読者に「雑誌を送る」という具体的ではつきりした作業があり、これが発行者には負担でありながら同時にモチベーションの更新にもなるのです。

もちろん、毎週、自分で情報を集め、記事を書いて送信するなんてことが片手間にできるとは思っていませんでした。「書き手」は協力者を探し、私はそれを編集し、送り出すだけと考えていました。幸い、当初から、新潟の柴野さん、滋賀の岩根さん、東京の黒坂さんなど自費出版ネットワークのメンバーや自費出版図書館の伊藤さんなどに面白い原稿を送っていただき、今でもそうです。「長すぎる」との批判をいただきながら毎回の発行が楽しみでした。自分で記事を書いていたこともあり、かなりキツイ時期もありましたが、最初の一年間はほとんど休刊なしでした。

ここで告白すると、実は最初の頃は、メールマガジンを拡大・

発展させて、有料化し経済的になりたつようにはできないかと画策していたんです。料理や旅行の記事を掲載したのもそもそもはこのために幅広い文化情報誌にしようというシタゴゴロがあったためです。ただし、この構想は一年をたたずに瓦解、そもそもインターネットに限らず、情報を売って商売しようなんてことは個人のできることでないと悟り、さらに「自費出版情報」なんていうテーマでカネをかせごうなどというのが間違いのもと、と知り、それからはもっぱら「趣味」で通すことにしています。見ようによつてはボランティアということになりますが、そう考えればこれほどやりがいのあるものはそうありません。

発行の経緯についても詳しく説明すると、自費出版ネットワークという団体の設立から話をしなくてはいけなくなります、基本的には当初から私（筑井）がひとりで企画し、発行してきた雑誌ということに間違いはありません。自費出版ネットワークには編集協力という形でいろいろと便宜をはかつてもらっていますが、初めから内容その他の発行責任はすべてひとりで引き受ける覚悟でした。当初は自費出版ネットワークの準機関紙的な構想も持っていました。最近「自費出版に興味のあるひとはどなたでもご購入ください」というスタンスをとっています。創刊時のこうした経緯は第1号に掲載された「創刊にあたり」の言葉の中にあらわれています。

第1号には「自費出版の世界―伊藤晋」「自費出版文化論―柴野毅実」「俳句入門―黒坂紫陽子」「役に立つのか自分史ソフト―筑井信明」という記事が掲載されています。「編集後記」はありません。

ん。第3号に「編集後記」が登場しますが、主として読者に連絡しなければならぬ技術的な連絡事項でした。

第5号あたりから「編集後記」の中に自分の感想や意見、伝えたいことなどを書くようになりました。以後、ほとんど毎号、単なる事務連絡もありますが、なにがしかの文章を掲載しています。基本的には各号の記事や寄稿者の紹介、さらにこの雑誌のテーマに沿った気楽な内容という感じを心がけてきましたが、その時々自分の気分が投影されてしまうのは仕方がないようですし、事件や社会情勢も反映します。そんなことから後で見ると、このメールマガジンの記録のようでもありながら、そうでないようでもあり、(これは本人だけかもしれないませんが)時間がない中での悪戦苦闘とその間に流れた個人的な思いがなんとなく読みとれるような気がします。

さて、最初に書いた昨年十一月から忙しさにまぎれている間にも時は経過して、創刊から三年になってしまいました。ここでひと区切りをつけようということと、内容が自費出版ネットワークの共有的なものからかなり個人的なものに変化してきたということもあって、二〇〇二年五月からは編集方針を変え、発行も月刊にしました。週刊と月刊ではかなり気持ちが変わります。振り返ってみると、特にこのメールマガジンという媒体を一週間単位でつくり発行し続けてきた三年間という期間は、えたいの知れない情報空間をさまよっていた一種の「漂流」であったような気がします。

創刊時の読者数は個人的に集まっていたメールIDを中心に三

十数人。数号発行のあと、インターネットのメールマガジン配信サービスに公開して読者を募集、現在は直接購読者と二つの配信サービス読者を合わせて五百人以上の方に定期配信しています。さらに、ホームページ上にバックナンバーをすべて公開していますので、不定期な読者もいると思います。

このメールマガジンを通じて多くの方と直接、間接に知り合うことができました。これが何よりうれしいことです。現在の気持ちについては「最後に」をお読みください。なお、一冊にまとめるにあたり多少の訂正・加筆をしましたが、基本的には発行時のままです。





1 年目

1999年5月～2000年4月

## 一九九九年五月三日（第3号）

### ■この雑誌の表示文字数について■

このメールマガジンでは技術的なことは述べないつもりですが、インターネットというテクノロジーを使った雑誌である限り、編集や表示に関する最低限の情報はお伝えしないといけないようです。

まず、このメールマガジンの表示行数は、第1号が三十八字（全角）のぶら下がり（句読点などが横にはみでること）あり、第2号が三十八字（全角）のぶら下がりなし。そして第3号（今号）は三十七字（全角）のぶら下がりありに変更しています。今号の表示をこれからの「MyBook」の基本字詰形式にしたいと思えます。これは、メールソフトでの見え具合やプリントアウトの結果などを勘案した結果ですが、もし問題があるようでしたら連絡をいただければ幸いです。

### ■人名などの表示文字／表記基準について■

ご存知のように、インターネットでの文字通信で、どのパソコンでも見える文字の数はいわゆるJISに登録されている文字だけですが、通常、専用ワープロでもワープロソフトでも外字とか機種依存文字とかいわれる、それ以外のJIS外字が使われます。この外字はことに人名や固有名詞に使用されることが多いので、著者名や書籍名にも結構使われています。実は第2号でも一部の人名でいわゆる旧字体に属する人名文字が使われていて、これをメールで流すと化けてしまうので、新字体に変更しました。この例の場合は偏が示偏か、ネ偏かの違いでしたからよかったです

が、もっと違う字体だったらどうでしょうか。しかし、今のところはこのようにするしかないのです。

また、これは純粹に技術的な問題かもしれませんが、半角の「や。で文字化けする場合もあります。数字の扱い（二ケタは全角、二ケタ以上は半角、句読点の扱い（、。など）などはメールマガジンに限らないことですが、製作過程でチェックしています。

今後さまざまな方に原稿や情報をいただく場合にも、きちんとした内容に統一できるように努力するつもりです。もれている場合があると思いますので、遠慮なくクレームをつけてください。

#### ■その他■

今号より、著者名に電子メールアドレスを表示しています。なお、この雑誌に掲載された内容につきましては当雑誌まで直接ご連絡ください。

一九九九年五月十日（第4号）

今回で4号。ここまでは定期発行を維持しています。次号から自費出版以外の話題を掲載する予定で準備を進めています。この雑誌の理念どおりに「食」と「旅」に関連した連載です。また、購読者の拡大もいよいよ本格的に開始したいと考えています。皆様のご協力をお願いします。

一九九九年五月十七日（第5号）

今回から生産と消費を結ぶ研究会（生消研）事務局長の石井正江さんに「旬の食材」というテーマで原稿をお願いしています。パソコンは苦手だそうですが、電子メールで原稿をいただいています。「食」を取り上げても、単なるグルメ記事ではなく、健康と環境・食糧問題を考えるような内容を期待しています。

一昨日（五月十五日）にこのメールマガジンの発行などの「情報誌事業」のための集まりがありました。インターネット上での雑誌については、賛否両論。総じて印刷業界の人は紙への愛着が強いようです。私はこういう「画面では見にくい」とか「パソコンは好きになれない」という議論はもうあまり気にしません。メディアとしての印刷とインターネットを比較してみればそれぞれにすぐれている面があることも確かですが、私にはそれが対立するものとは思えません。両者の良さを融合したメディアができればと考えています。

一九九九年五月二十四日（第6号）

今回から岩根順子さんの新連載『本づくりの周辺』をお送りします。岩根さんは滋賀県で「淡海文庫」や「近江歴史回廊ガイドブック」シリーズなど地域に密着した質の高い出版を長年続け、かたわらご自身も近江商人の研究で全国を回るなど精力的な活動をされています。

そういえば、他の執筆者の方の紹介もしていませんでした。機会を見て、順次紹介させていただきます。

一九九九年五月三十一日（第7号）

柴野氏の「自費出版文化論」は、行政と（自費）出版文化というテーマになってから俄然、同時進行ドキュメントの様相を呈してきました。新潟出版文化賞というイベントが行われることになったからです。担当の新潟県文化振興課もこの雑誌の読者になり、今後どのような展開になっていくのか楽しみです。また、これに関連して滋賀の岩根さんは地方行政と調和した出版などの事例を紹介されています。

自費出版の活力を損なうことのない「地方文化賞」のモデルケースが生まれることを期待しています。



一九九九年六月七日（第8号）

今号から新連載『汽車の旅・電車の旅・好奇心の旅』をお届けします。著者の松井さんは本文にもあるように現職の「JR東日本」の社員。勤務時間に電車に乗っているのに、休日も全国の電車や汽車に乗ってまわるといふ鉄道旅行マニア。父親も鉄道員で、友人によると遺伝子に鉄道の線路が組み込まれているに違いないとのこと。そういえば私（筑井）の父親も国鉄職員（機関士）で、遺伝子に線路が多少組み込まれているとみえ、今でも車よりも電車で移動するほうが好きです。

丸山健二の最新作『虹よ、冒険の虹よ』（上下巻・新潮社）が発売されました。丸山健二はほとんど唯一私が今でも読んでいる現代の作家ですが、数年に一度しか作品を発表しません。しかし、本当に小説、特に日本の現代小説を読まなくなっています。これは私だけでしょうか。

一九九九年六月十四日（第9号）

実は、私は、このメールマガジンを作成するために専用のソフトを作成しています。通信するためのソフトではなく、実際に記事を編集し、完成した記事を総合して一号分のポリウムを完成させ、さらに、規定の字詰めで整形して最終のテキストファイルを作成するまでを順次行うソフトです。購読者の管理（登録・削除など）もこのソフトで行います。

最初は、メールマガジンなど単なるテキストデータを編集するだけだと軽く考えていたのですが、実際にやってみると、連載記事の編集などで前号や次号の記事を参照したり、表題部分を毎号正確に印字することが必要だったり、なにより、用語の統一などを行う必要があるためです。

ソフト作成をはじめてみると、編集画面でもただの入力機能ではもの足りなくなり、文字の同時置換、連続検索、半角変換、データの挿入など、エディタのような機能を追加していくうちに結構おおげさなものになってしまいました。いまも、記事の順番を入れ替える機能を追加しようと思っているところです。

一九九九年六月二十一日（第10号）

「自分史」の材料として自費出版図書館からお借りした本の一冊『聞き書き博労一代』は神奈川県津久井郡の話です。この津久井郡という地名は個人的にやはり気になります。私の姓は筑井ですが、ご存知のように地名・民俗学の立場からは音が大切で、地名は漢字到来以前からあったものでしょうし、明治以前には、漢字を読める人も多くはなく、書き留める人によって同じ「よみ」が違う漢字として表記されることもあったと思われるからです。事実、津久井地方にも筑井城という古城や地名が残っています。

私の父は北関東の出身ですが、三浦半島一帯の領主であった三浦家に筑井という家来がいたことや、この津久井（筑井）地名の存在から考えて、神奈川県に縁があるような気がします。ルーツ探しをする気はいまのところありませんが、なんとなく気になるのは柄にもなく「自分史」のことなどを書き始めているからでしょう。皆さんは自分の姓のルーツが気になりますか。

第11号は「編集後記」なしでした。

一九九九年七月五日（第12号）

先週はいろいろと出歩くことが多く（いつもそうですけれど）、週末には自費出版ネットワークの総会や自費出版文化賞の表彰式もあり、そのための準備や相談コーナーの手伝いなどで週末が完全につぶれました。いよいよ休刊にしようかと思っただのですが、お願いしてある原稿が次々に到着しているので、そうもいきません（ちなみに当雑誌は現在のところ完全なボランティアで成り立っています。原稿料は一切出ません）。なんとか発行できました。

本文にあるように、七月三日に開催された自費出版ネットワークの総会で、情報誌（PR誌）発行事業というのを決定しました。この「MyBook」はもともとこの情報誌（PR誌）発行事業の先行企画としてスタートしたものです。今後なるべく近い時期に別の形の情報媒体のお知らせができると思います。

一九九九年七月十二日（第13号）

月曜日（七月十二日）の午前中に用事ができてしまい、発行を火曜日に延期することになりました。最後の原稿は七月十二日の午前十時過ぎに送られてきたので、がんばれば午前中に発行できたとは思いますが、一人の身ではどうしようもありません。それより、一日遅れで発行できたのですから、電子メールを活用した原稿データの受信や雑誌発行の簡便さにあらためて驚きます。一部FAXやFD入稿（？）もあります。いずれにしろ双方のスケジュールに関係なく作業ができ、物の製造という面がないのがなんとかやっていける理由のような気がします。

昨日の夕方、自宅から徒歩三分のところまで野生のタヌキを発見。高校の敷地の中ですが、案外おっとりしてこちらを見ても逃げる様子もありませんでした。

## 一九九九年七月十九日（第14号）

この一か月ほどの間に私の持っているソフトのバージョンアップがあいつぎました、

順不同ですが、「桐 Ver8.0」、「Flash4.0」、「Office2000」、「MytalkFax2000」などに「Acrobat4.0」などです。一つだけ無料のバージョンアップ品がありますが、それ以外は二〜三万円かかりますから、私は高額なソフトを使わない主義なのですが、それでも結構な出費です。バージョンアップなどしないという人もいますが、私はソフト開発業者という手前、むしろ早めにバージョンアップをするようにしています。

また、ソフトを作る立場からいうとバージョンアップという名のバグ取りに期待しているわけです。とはいえ、「Office2000」はまだわかりませんが、お笑いもののバグが残っていることも多くちよつと検証が必要です。Adobeの最新製品にも非常に単純なバグがありました。

一九九九年七月二十六日（第15号）

先週に評論家・江藤淳氏の自殺があり、夫婦とか人間の生と死についてあらためて考えさせられていると、不思議なことに「MyBook」周辺にもそれにまつわる話題が集まってきました。「自費出版の世界」で伊藤さんが紹介されている宮崎義光編著『水の輪―八恵子追慕』は、亡くなった夫人への追悼句集です。「本づくりの周辺」で岩根さんは、母親の「短歌集」出版や亡き父君の孔版画作品集出版の思い出などから「本づくりにも匂がある。著者にとって一番必要な時に、著者、作者の思いのたけを充分に反映した本づくりこそ必要」と述べています。

さらに実は先週には、自費出版ホームページに、ごく最近奥さんを病気で亡くされた三十歳代の男性からの手記が寄せられています。また個人的には、つい昨日、追悼集出版の相談を受けました。

「死」は誰も避けることができません。生き残った人間には去っていった人間の思い出だけが残ります。この思い出を永遠のものにしたいという強い気持が人に墓碑銘を書かせ、追悼集を出させるのでしょうか。出版という仕事のひとつの使命を見たような気がします。

一九九九年八月二日（第16号）

七月最後の日に自費出版ネットワークの総会後初めての幹事会がありました。今年から幹事も大幅に増やし、事務局にも専従者を入れて、しっかりとした事業活動をやっつけていこうということになりました。もちろん今までもちやんとやってきたつもりですが、この「MyBook」も含めて、情報誌活動や各種の研修活動、会員サービス事業などでやることが多く、しかも本格的になってきたということからです。

今回から「習作・自分史」という連載がスタートします。当面、「自分史の実験室」と隔週交代で掲載の予定で、二つ併せて「自分史」に興味を持つ方のための参考になれば幸いです。



一九九九年八月九日（第17号）

今回から「自費出版ホームページ新着紹介」ということで、新規に自費出版ホームページに掲載する書籍をこの雑誌でも紹介します。

本誌に連載されている記事はすべて「MyBook」のホームページで見ることができます。メールマガジンは、このようにホームページと連携しながら新しい情報流通媒体として進化していくようになると思います。多少の工夫をしましたので、ご覧ください。

一九九九年八月二十三日（第18号）

先週は「MyBook」も世間並みに「お盆休み」をとらせていただきました。二週間の間に、暑さも峠を越し、空にはいつの間にか<sup>いわずとも</sup>鯛雲がみられるようになりました。今年の夏は（関東地方だけかもしれないが）例年になく、大気が澄み、真っ青な空が印象的でした。夏にはほとんど霞んで見えない富士山を今年は数回望むことができました。

一九九九年八月三十日（第19号）

前回と関連しますが、今年の夏、関東地方は雨や雷が多いようです。先週の火曜日（八月二十四日）、自費出版ネットワークのことで東京・中央区の事務所の近くで武内事務局長と打ち合わせをしていると、急に大雨。少し待つてからタクシーでJR神田駅までいくと、構内には人があふれんばかりです。なんと東京のJRはすべて動いていないというのです。落雷で送電施設がやられたことは後で聞きましたが、なにせ、ものすごい雨ではあるし、こちらはむなしく待つているしかありません。そのうちに山手線が動き出したので私はなんとか帰れましたが、中央線などはかなり遅くまで停まっていたようです。

テレビのニュース速報によると今夜（八月二十九日）も集中豪雨で首都の電車は停まっているようです。大雨、雷に限らず、最近は「飛び込み」などの人身事故による運転ストップも多いようで、世相を反映しています。

一九九九年九月六日（第20号）

この九月一日から「自費出版ネットワーク」の新体制がスタートしました。事務所（とてもそういうほどではありませんが）も八階から七階の（社）日本グラフィクスサービス工業会事務局内に移転しました。七月三日の総会後の準備が一段落したことになります。FAX専用番号もできました。近く自費出版ネットワークのデータを掲示したホームページも作りたいと思います。

一九九九年九月十三日（第21号）

久しぶりにローカル線各駅停車の旅をしました（信越線はローカルではないかも知れませんが、柏崎と長岡の間ならローカルでしょう）。日曜日なので（日曜日も？）、車内は空いていて、車窓の稲刈り風景を眺めながら両足を伸ばして居眠りするという極楽体験をすることができました。車外に見える生活と車内の風景がいわば同じ視線（生活）の高さにあるのが在来線です。これに対して、長岡から大宮までの新幹線は目的地に一直線、周りを見る余裕もなくただただ進みます。

これを比較して近代効率主義のむなしさを指摘するのはあまりに当然のことですが、誰もが感じていながら一向に改まらないのがこの国です。高速道路や新幹線、海底トンネル、河川の三面舗装——多くの人が「もういい」といつているのに計画は進んでいるのです。（余計な注ですが、大量輸送手段が必要ないといっているわけではありません。そこに効率以外の要素をいれるといっているわけです。また、そうはいつても私は乗り物としての新幹線や宇宙ロケットなどは好きなのです。これは戦争嫌いの兵器マニアみたいなものでしょうか。）

一九九九年九月二十日（第22号）

あるデザイン事務所から電子メールの本文で書いた引越し先の地図を受け取りました。添付ファイルならどんな図形でも送れますが、本文は純粋なテキストですから、もちろん■や□↓といった文字を組み合わせて作られたものです。結構見やすくてきます。（ちなみに歩道橋は二でした。）

こういうのを見ると一昔以上のグラフィック機能のないワープロで罫線記号を組み合わせて地図を書いたり（描いたり）、パソコン通信でおなじく文字を組み合わせてお正月の門松を書いたことを懐かしく思い出します。曲がった道を書くのが一苦労でした。電子メールが文字中心（文字だけ）なのもまもなく変わっていくでしょう。それでも人間の根本的な手作り感覚はどこかに生き残っていくような気がします。

私がよく散歩する黒目川という小河川に紙くずなどがかなり大量に不法投棄されていました。乗用車で運べる量を超えていますから、かなり計画的・悪質です。ほんの少し残っている自然にこういうことをする人の頭の中はどうなっているのでしょうか。

一九九九年九月二十七日（第23号）

私が散歩する範囲でヒガンバナの咲いている場所はほんのわずかしかなかった。今日（九月二十六日）の夕方、コースのひとつである新河岸川という川の土手沿い（最近は秋になるとキクイモの黄色い花ばかりが目立つようになりました）での観察では数株ずつが四く五か所、ちよつとまとまっている場所は一か所だけでした。今年の夏が暑く雨も多かったせいでしょうか、周囲の草の丈が高く、ヒガンバナの赤が目立ちません。この花は正式名より仏教的・超宇宙的な感じがする曼珠沙華まんじゆしあけというほうが好きです。

先週号に目次が掲載されていませんでした。初歩的ミスでお詫びします。

一九九九年十月四日（第24号）

新しいソフトを買うと、ビジネスであれ、ゲームであれ、きれいなパッケージに入ってきます。最近では紙のマニユアルが減って薄く軽くなりましたが、パッケージ自体はますます華美になっていくようです。

このパッケージはほとんどが厚紙で作られた箱ですが、いまは無くなってしまった会社の主力ソフトや一世を風靡した（そしていまは見られない）ソフト、こんなのがあったの、という変わったソフトなど、見ていると結構あきません。パソコンの世界もそれだけ歴史を刻んできたということでしょう。そのうちに『なんでも鑑定団』に「一太郎」のパッケージが登場するかもしれません。事務所の掃除をしているときにこんな思いが浮かび、古いパッケージを捨てられなくなりました。まあそれぞれのソフトには若干の思い出もありますしね。



一九九九年十月十一日（第25号）

先週に（東京・名古屋地区で）自費出版文化賞の告知（社告）が朝日新聞に掲載されたためかどうかはわかりませんが、「自費出版ホームページ」やこの「MyBook」への連絡・問い合わせが増えました。「データを利用してほしい」という戦争体験の自費出版を研究している方や「自分で出版した本を紹介したい」という方などさまざまですが、当方としては、基本的にはできるかぎり応える（あるいは答える）ようにしています。

また、昨日は自費出版年鑑の取材で山梨県・富士吉田市の土橋寿先生主催の「自分史文学館」に出かけて「自分史研究」を続けている方たちの成果を見せていただきました。

どんなテーマであつても世の中にはいろいろなところで地道に研究している人たちが数多くいるのです。その成果の多くは「本」や「冊子」という形で発表されます。「自費出版ホームページ」やこの「MyBook」、さらに今度発行する季刊雑誌などがその人たちを結びつける力になればと思います。

一九九九年十月十八日（第26号）

黒坂氏の「俳句入門」の季語にも紹介されているように、秋は空や雲が美しい季節です。高校生の頃、私は水泳部にいました。十月になるとプールを離れて陸上トレーニングに移ります。毎日、裏門から出て、崖を下り、見沼用水沿いの土手を走りました。疲れると寝ころんで秋の青い空を見上げていました。何を考えていたのか、今となつては想像もできないほど遠い気がします。

一九九九年十月二十五日（第27号）

このメールマガジンのホームページは現在「<http://www.mm.jp.or.jp/mybook/>」です。mm.jp.or.jpはasahinetが事業所向けのサービスで行っているバーチャルモールですが、「MyBook編集部（エヌケイ情報）」では、新たに「[mybookjapan.com](http://mybookjapan.com)」というドメインを取得しました。これまでできなかった、掲示板や検索などのシステムを作れるようにしたいというのが目的です。勉強していかなければいけません、がんばってみたいと思います。

この新ドメインの実験もかねて、今年末に発行予定の「本の風景」のホームページを

[http://www.mybookjapan.com/magazine\\_1/index.html](http://www.mybookjapan.com/magazine_1/index.html)

に移動しました。ただしまだテスト中です。

一九九九年十一月一日（第28号）

岩根さんのエッセイにもあるように、今日（十一月一日）から年賀状の販売、同時に、年賀状印刷を行っている会社が忙しくなります。実は私も、十年近く前から、ある会社の年賀状システムにかかわっていて、今年も、先月はかなり忙しい思いをしました。パソコンがほとんど使われていなかったところからの仕事ですが、今では、入力から、製作、出荷処理、納品・請求処理とすべてがパソコンとデータベースで処理されています。

組版処理も数万円程度のパソコンソフトで行います。来年あたりからはカラー印刷の一部もパソコンで処理するようになるかも知れません。年賀状も、印刷会社に頼まず自分でつくってしまう“家庭内自費出版”が増えているので、専業会社としては、その上をいく新しいサービスを考えなければいけない時代になったようです。

一九九九年十一月八日（第29号）

ステイヴン・キングといえば日本でもかなり人気がありますが、単なるホラー作家と思っている人が多い。私もそう思っていたのですが、長編「IT」を読み、文学の歴史に残る作品・作家ではないかと評価を改めました。キングの多くの中・短編も悪くはありませんがエンターテイメントとしてのサーピス精神が行き届きすぎているところがあります。「IT」は、この作家の才能を生かすためのさまざまな条件がうまくそろって生まれた稀有な作品なのだと思います。

ところで「IT」で想定されているのは作者の同時代です（ある種の自伝的要素もあるようです）。ステイヴン・キングは一九四七年生まれですから、わたしより二つ年上ですが、遠く離れたアメリカの田舎の一九五〇〜六〇年代の少年たちの文化が意外に当時の日本の子供たちと共通していることにも興味をひかれました。

## 一九九九年十一月十五日（第30号）

お知らせしましたように、先月から新ドメイン「mybookjapan.com」を取得して一応自分のサーバというものを持つ身になりました（まあ、バーチャルではありますが）。それに伴い、またIDが増え、いったい私はいくつのIDを持っているのか考えて唖然としました。

まず、もっとも使っているのが、最初にインターネットのプロバイダとして契約（個人）したASAHINETの「pubn-ki@asahi-net.or.jp」。ASAHINETとはMyBookを開設するにあたって新規に法人契約して「m6876nz454c@asahi-net.or.jp」というIDももらいました。

実はその前に私は「NFTYSERVE」MASTERNETというパソコン通信にも入っていて、そこもやめていないので、それぞれ「VZN00166@nifty.ne.jp」、「ae445@masternet.ne.jp」というIDも持っていることになりました。

さらに、今回、新規ドメインを持ったことにより、「tsukui@mybookjapan.com」というIDも使えることになりました。実に五つのIDを持っていることになりました。

## 一九九九年十一月二十九日（第31号）

先週は当方の都合で配信できませんでした。あらためてお詫びします。

今回から、二つの連載が始まります。

### 1 「戦記を読む」

ホームページ『私設文庫館―太平洋戦争編―』を運営されている松浦武さんに、太平洋戦争を中心に自費出版を含む「戦記」「戦争体験記」の解説、紹介、書評をお願いします。

### 2 「著書を語る」

一冊の本には、その内容はもちろん、成立の経緯・背景も興味深いものがあります。最初にお願したのは今年二月『愛知県岡崎地方史関係文献目録』という労作を自費出版された小林清司氏（愛知県岡崎市立図書館）による発行までの経緯です。著作の「まえがき」として書かれたものですが、この小論自体大変に貴重なものです。

一九九九年十二月六日（第32号）

連載が二本増えて、ますます「長い」といわれそうです。私たちが読書をする、つまり文章を読む目的にはいくつも理由がありますが、知識を得るというのはその中で純粋な楽しみです。ただ、それもセンテンスのなかで理路整然と頭に入るように意識して書かれた場合のみです。生の情報の羅列や論理的でない文章は面白くないばかりか実は記憶にも残らないのです。

「旬の食材」の著者・石井さんがシアトルで開催されたWTO（世界貿易機構）に日本からのNGOの一員として参加していますが、現地ではかなりの混乱があったようですが、農業は完全にインターナショナルな問題になっています。



一九九九年十二月十三日（第33号）

第三回日本自費出版文化賞の応募が十日で締め切りになりました。私のところにはホームページで紹介する本だけが送られてきますが、今回も力作ぞろいで、個人の出版文化の裾野の広さをあらためて実感させられます。一度に登録できないのが申し訳なく思っています。

情報過多といわれる現代ですが、こうした、マスコミにもインターネットにも載らない（乗らない）情報を知るすべがないのは変わりがないようです。

一九九九年十二月二十日（第34号）

一九〇〇年代（あるいは一千年紀）もあと十日余りになりました。今年は忘年会の数も少なく落ち着いた年末になりそうなのは（個人的には）結構なことだと思います。

「MyBook」は、通常の雑誌とは違い、年末年始も予定どおり発行するつもりです。二〇〇〇年最初の発行は一月三日になります。この日は、二〇〇〇年問題のため、ちゃんとコンピュータが動いているかどうか確認するために（システム担当者が）出社する会社も多いようで、私も付き合わなければいけない所があるかもしれません。

一九九九年十二月二十七日（第35号）

本誌連載の「文化と出版」で柴野さんが朝日新聞の発行部数について訂正をしています。これについては私も責任があります。雑誌の発行前に原稿を見るのは著者と編集者以外にないし、編集者には原稿の内容についてチェックをする義務と権利があります。この原稿を読んだときには「いくら大新聞でも三〇〇〇万部といったら日本の全世帯数になるくらいだからそんなに出ているはずがない」と思ったのですが、結果的には気にしないで出してしまいました。

これがミニコミの気楽さといえませんが、これに限らず、原稿の内容確認というのは実は編集者泣かせの大問題で、あまり厳密にやっていると定期雑誌などは出せなくなりそうです。したがってそれこそ大新聞から超ミニコミまで、この辺は例えば差別用語や政治・宗教的偏向内容以外はどこかで目をつぶって出しているのではないかと思います。

しかしよく考えてみれば、本当に悩んでいるのは原稿を書く著者本人です。世の中には簡単に確かめようのない事項が山ほどあり、著者はそれを自分の判断と責任で「事実」としてあるいは「意見」として断定しなければなりません。結果的にそれが違うとなれば批判は避けられず、逆に正しくても誉めてくれる人はほとんどいません（それが世間というものですよ！）。これは新聞などの無署名の記事であっても同じことで、スクープと誤報が裏表で

あることは先日朝日新聞の「ご懐妊報道」が示すとおりです。

なお、前回の「文化と出版」では、連載回数を誤記してしまい、本文とのつりあいでも誠に奇妙なことになりました。これは言い訳無用のミスです。これを通常「恥の上塗り」といいます。

## 二〇〇〇年一月三日（第36号）

一月一日の夜、インターネットで「二〇〇〇年問題関連サイト」を調べていて気になるニュースがありました。NECの携帯電話で、古い日付のデータを消そうとすると保存してある全てのメールが消えてしまうという事故についての報告です。原因自体は日付計算の二〇〇〇年対応の遅れで単純なものです。考えてみるとシステムのメンテナンスの中でも、普段はあまりやらないこうした処理は対応を忘れやすいものなのです。

表面に出る、日付表示や金利計算、請求書・納品書の計算結果などはユーザーにもすぐわかりますから、かえって対応がしやすい。ところが古いデータの処理などはその時になるまで誰も気がつきません。しかし、ここに計算違いがあつて、一九九九年までの全データが消えてしまったら、というのはまさにシステムを作っている者にとつての悪夢です。消えたデータは復旧できないからです。

「二〇〇〇年問題」はこれから、こうした形で徐々に出てくるでしょう（私にとってはひとつことではないのです）。この問題は、人間の注意力がいかに不完全であるかを示しているといえます。人間が完全でない以上、人間の作ったものも完全ではありえないということです。

二〇〇〇年一月十日（第37号）

いつものことながら一月に入るとあつという間に十日になってしまいました。この三連休もやるが多く休めませんでした。まあ、ホームページの作成や雑誌の発行を「趣味」ということにすれば「休みの日はほとんど趣味を楽しんで過ごしています」ということになるわけでまことに優雅な生活です。数えてみると、本業のほかに、ホームページを四つ管理して、週刊のメールマガジンを一つ出しているわけですから、手が回らないことも出てきます。

ということ、なんと「掲示板」の管理者用パスワードを忘れてしまい、あわてています。こんなにIDやパスワードが多いと、よほど注意しておかないといけません。バーチャルの世界だけでなく、最近はおートロックのマンションなども多いので、鍵を忘れて家に入れないというような災害も結構あるそうです。年寄りにはますます住みにくい世の中になっていきます。

二〇〇〇年一月十七日（第38号）

人と人とのコミュニケーション（普通は「会話」あるいは「手紙」などになりますね）の大切さは誰でも分かっていますが、実行するのはこれまた難しい。恋愛からビジネスまで、人間関係の悩みの八十%くらいは、このコミュニケーションの問題でしょう。言えないこと、言わないけれど分かっていること、言っても分からないこと、後で後悔するような言い方。コミュニケーションに失敗したとき、結局、人間はひとり、自分の意識から一歩も出ずに死んでいくしかないなど感じます。

冬の夜の感想です。別に何かあったわけではありません。

二〇〇〇年一月二十四日（第39号）

自費出版文化賞の締め切りが過ぎて一か月。現在、事務局でデータベースへの登録が行われています。その後「ホームページ」登録希望分が私のところに送られてくるので、ものによっては二か月前に送っていた本が、まだ「ホームページ」に掲載されていないことになり、応募された方から問い合わせをいただいています。登録したことだけでも中間発表できないものかと考えます。それでもあと二週間くらいで全部処理しないと、一次審査に間に合いません。

次週の土日は、愛知県で自費出版ネットワークの全国集会があります。そのためというわけではありませんが、次週は「MyBook」をお休みさせていただきます。

徳島市の「吉野川可動堰住民投票」の結果は快挙。「技術的な問題は住民投票になじまない」というような政治家・官僚の建前論に対して、要するに「あんたたちの言うことは信用しません」ということです。



二〇〇〇年二月七日（第40号）

新連載『本と私』を始めます。まず登場するのは株ひかり工房の喜田りえ子さんの「春秋新書はこうして誕生した」です。今後にご期待ください。

「出版の新しい流れ」で書いた名古屋の研修会で、製本の「無線綴じ」はどのくらいの期間持つのかという話がありました。家に帰って書棚をみるとたまたま目にとまったのが清岡卓行の詩集『ひとつの愛』（講談社）。一九七〇年九月発行、ちょうど三十年前の本です。この詩集に納められた詩にはいくつか運命的な（？）想い出もあって懐かしかったのですが、それは別として、多少古びたのは仕方がないとして、三十年たっても確固たる存在感を持ち、まったく同じように読める書物というものの生命の長さ。しばし感嘆です。同じ頃買った「Simon and Garfunkel」のLPは再生する手段がなく、CDで買いなおしました。

二〇〇〇年二月十四日（第41号）

「文化と出版」で書かれている新潟・柏崎でおきた犯罪については、二月十一日に容疑者が逮捕され新たな事実が判明するなど、いまだにテレビ・新聞・週刊誌等での報道が続いています。おそらく地元ではもっと大きな扱いになっているでしょう（ただし、関西では京都の事件の方が大きいかもしれませんが）。

こんなことは言わないほうがいいのかもしれませんが、著者の柴野さんには同じ年頃の娘さんがいますから心中はかなり複雑だと思えます。ついでにいうと私にも少し上ですが娘がいます。こうした事件の報道やその姿勢は別にして、事件がおこるたびに加害者や被害者に同情したり激怒したりする回数は年齢とともに増えていくような気がします。人生経験を踏むたびに感情移入の度合いは強くなるのでしょうか。単なる野次馬気分といわれればそれまでですが、こうした犯罪や事件に対する関心も「文化」のひとつではあると思えます。

二〇〇〇年二月二十一日(第42号)

発行している会員名簿の「趣味」の項目に『ひとの悪口』と堂々と載せていた名物社長が、昔勤めていたある団体にいました。普通「悪口」は誉められる行為ではありませんが、個人ではなく組織や体制に対する批判は「悪口」とは違うと思います。本誌連載の『ある技術者の物語』(中西研二氏)は通常の自分史と比較すると非常にユニークな内容になっています。これまで携わってきた中西氏の業務を通じて日本における大型コンピュータのシステム開発の歴史とその中で反省やある種の批判、教訓を述べているからです。「元職場の批判」は一般にやりにくいものようですが、しかし、私はこれからの自分史は、自分の経験を通じて、組織や社会の問題点を浮き彫りにして、今後の反省にするという視点も必要だと思います。立場は違いますが、「『愛知県岡崎地方史関係文献目録』完成まで」の小林氏も、自分の属する組織への批判が根底にあるようです。

一時の自分史の主流だった「戦争体験」には戦争を起こしたこ  
とへの反省、権力・軍隊に対する批判、反感がその根底にありま  
した。いま、この社会のシステム全体に対しても同じような反省  
や批判が必要です。これからの「自分史」の意義の一つではない  
でしょうか。

二〇〇〇年〇二月二十八日（第43号）

自宅の最寄駅（東武線・志木駅）近くにショッピングビルができて、ついでに駅ビルも新築されて同時にオープン、いわゆる再開発というやつで駅周辺の景観が一変してしまいました。ショッピングセンター自身は「グルメとファッション」が中心ですが、駅ビルには旭屋という大型書店が入っています。一フロアを全部使い、郷土本コーナーもある、県内でも有数の大型店になるそうですが、これで駅周辺には四つのかかなり大きな書店がひしめくことになります。そんなに本が売れるんでしょうか。

ちなみにこのオープニング・セールで一番賑わっていたように見えたのは薬局で、私も「アレルギー性鼻炎」の薬を買いました。

二〇〇〇年三月六日（第44号）

自費出版文化賞の応募受け付けでは毎年何人かから「対応が悪い」とのお叱りを受けますが、「サギ商法」呼ばわりされたのは始めてです。少し前ですが、申込用紙にこんな文章が添付されてきました（参考のために全文掲載）。

「登録料三千元、わざわざ早起きして年末大混雑の銀行へ行つたのに『当座』か『普通』かの区別も書いていないので、とうとう無駄な時間を浪費してしまいました。一体お宅（注：主催者のこと）は信用できるのでしようか、只で私たちの本を手に入れる為のインチキ商法ではないのですか。今まで誰もそんな事に気がつかなかつたとは！」

この人（女性です）は、さらに事務局や役員のところにも電話もかけてきて、相当執拗に自費出版文化賞の「インチキ性」をまくしたてたということ。経歴をみると東京大学出身で欧米の大学でも日本古典文学の教授をつとめ、現在はライフワークの源氏物語の研究書を自費出版している大変な方の方ですし、著書そのものはレベルの高いものです。本など書く人の中には時々こうした、常識を超越した方がいます。楽しんでお付き合いするしかありません。

二〇〇〇年三月十三日（第45号）

小林清司さんの連載「『愛知県岡崎地方史関係文献目録』完成まで」と、喜田りえ子さんの連載「春秋新書」はこうして誕生した」が今回で終了します。私はこのお二人ともに「電子メール」でのお願いと原稿受信ですましてしまい、顔も声も存じあげないのですが、本当にありがとうございます。またのご寄稿を期待しています。

次回から、『自費出版三十周年記念文集―時は流れて―』よりの連載を始めます。東京・八王子の揺籃社（清水工房）が自費出版を始めて三十年たつのを記念して今年発行したのですが、実際に自費出版を行った多くの方々がその思い出や著書について語っています。次号ではこの書に寄せられている巻頭の色川大吉先生の序文をお届けします。

二〇〇〇年三月二十日（第46号）

DMみたいなFAXがたくさん来るので用紙がすぐになくなります。そこでパソコンでの受信に切り替えてみました。私の使っているのは「まいとーくFAX」というソフトで、以前から送信はほとんどパソコンでやっていたのですが、受信もやってみると意外に便利なことを発見しました。

パソコン起動時に自動的に立ち上がり、FAX受信時にはバックグラウンドで動いて「未読ファイル」に画像ファイルの形で溜まります。見て不要なら消せるし、必要ならプリントもできます。通常はそのまま保存しておけばいつでも遡って見ることができません。私はFAXの出力紙をよく無くしてしまうのですが、これですの心配がなくなりました。電子メールとまったく同じ感覚です。

必要ないDMも迷惑ですが、意図的に送られてくる悪意の手紙やFAX、電子メールは立派な犯罪です。自費出版ホームページにも書きましたが、最近登録している著者（主に女性）から個人情報の削除を要望されることが多くなりました。コミュニケーションが高度化すると思わぬ危険も生まれるようです。

二〇〇〇年〇三月二十七日（第47号）

「日本自費出版文化賞」に寄せられた方々のデータをもとに、日本の自費出版の現状の一端を眺めるといふ試みを行いました。雑誌『本の風景』第2号に掲載されます。本格的な傾向を探るにはちよつと資料不足でしょうが、ほとんど統計もないこの世界の一端くらいは分かるかもしれません。主に、著者の地域別（都道府県別）構成と年齢、性別、内容分類——などを応募作品のなかから集計してみたものです。

結果は、北海道から沖縄まで全国各地から応募が寄せられていることがわかり、第一回と第三回の二回を通して応募の無い都道府県はありませんでした。東京ばかりでなく、地方の方々の力によつて支えられていることが分かります。また、平均年齢では二回とも六十三歳というまったく同じ数字が出て、偶然とは思えないほどです。現在のところ、自費出版が熟年世代の文化であるという面は否定できないようですが、女性を中心に若年世代の増加傾向もうかがえます。本を作るには時間がかかります。現在の傾向が現状に反映されるのは四く五年先なのではないでしょうか。



二〇〇〇年四月三日（第48号）

インターネットで「自費出版」や「自費出版ネットワーク」を検索していて、私たちとは違う「自費出版ネットワーク」があり「自費出版大賞」が行われていることを知りました。主催者は大坂の「遊タイムス出版」という会社で、「自費出版ネットワーク」といっても私たちのように企業などの集まりではなく、自費出版物をインターネットに登録して販売するシステムのようなのです。ここに登録された本および「遊タイムス出版」が出版した本の中から毎年二回「自費出版大賞」なのはな賞」が贈られるというものです。他の団体やマスコミとの共催はなく、まったくの自社のイベントのように見受けられます。

この「自費出版大賞」がいつから始まったのかは、ホームページを見る限りわかりませんが、また特に審査員等も明記されていません。もちろん自社のPRのためにこうしたイベントをやることには何の問題もありませんし、この会社自体は良い本を出しているようです。しかし、もし、私たちの「自費出版ネットワーク」と「日本自費出版文化賞」の存在を知っていて、同じようなネーミングをしたのだとすれば、オリジナリティをなにより大切にする業界人としては、はなはだ残念といわざるを得ません。

毎年のことながら、桜が咲いた後の一〜二週間ほどはほとんど奇跡と違っていいほどの植物の躍動が感じられる季節です。木々の枝が赤くなり、黄緑、そして濃い緑に変わります。雨が降った日の翌日などには、それが一瞬の間に起こったかのように鮮やかに感じられます。

新しい葉に包まれたこの季節の樹木は何度見ても飽きることはありません。もともと日本の温帯林ではこうした落葉広葉樹が主流だったそうで、杉や松などの針葉樹は（防風林や建築材として）人工的に植えられたのです。おまけに花粉も出しますから、日本の山からこれらを切って元の広葉樹林にもどすべきだという先日の朝日新聞の投書子の意見に私も賛成です。

二〇〇〇年四月十七日（第50号）

「MyBook」は昨年の四月十九日に第一号を発行しました。以来一年間、ほぼ定期発行できました。私が当初考えていた「生活文化情報誌」という性格は途中から、表題通りの「自分の本を出す人とそれをサポートする人の間を結ぶコミュニケーション誌」のような位置づけに変化してきています。

これは、インターネットを通じての媒体—メールマガジンというものの本質がわかってきたためと考えてください。メールマガジンは一般誌ではなく、全てが「専門誌」であり、その専門分野が細かいほど存在意義がある、らしいのです。その意味では、まだまだ純粹ではないと思いますが、これは単に力及ばずです。

一年を過ぎても、これまで同様に続けていきます。よろしくお願ひします。

二〇〇〇年四月二十四日（第51号）

「NEWS」でお伝えしましたように昨日（四月二十三日）に第三回目の日本自費出版文化賞第二次選考会が開催されました。私を含め、この「MyBook」執筆者の多くが審査員なので二日の間、茅葺屋根の民家に閉じ込められていました。三回目にして始めて二日間とも晴天に恵まれましたが、野鳥の声を聞くばかりで外を眺める余裕もありませんでした。

ということ、今回は変則的な内容になりました。ご了解ください。松井久治氏の「汽車の旅・電車の旅・好奇心の旅」は久しぶりの登場です。おなじみの「松井久治の世界」をお楽しみください。



2年目

2000年4月～2001年5月

二〇〇〇年五月一日（第52号）

前号は製作に時間がなくあわてていましたので、ちよつとミスがあつたようです（そうでなくてもあります）。

自費出版文化賞の入賞作品が決まりましたが、この雑誌などで紹介した著書の作者から「結果はどうでした？」という問い合わせがあります。本人は自信があるようで、事実、面白い作品だと私は思うのですが、残念ながら、このほか「本の風景」などで紹介している作品も含めてほとんどが落選しています。

せめて二次選考には残るだろうと思つたものも落ちていて、人間による選考の難しさというものを考えます。多少の身びいきがあるでしょうが「落選の理由を教えてください」という応募者の気持がわからないではありません。

二〇〇〇年五月八日（第53号）

「文化と出版」で書店論が展開されていますが、私も最近面白い体験をしました。今後別の機会に紹介することになりますが、今年三月に出た『電腦社会の日本語』（文春新書）を探していたときのこと。（地元の）大型書店では見つからないので都心までいかなければと思っていたのですが、なんとすぐ近くの個人書店に二冊もおいてあるのを発見。

思うに、大型書店には売れ筋（と判断された）本が優先的に配本され、残りの本がこの小さな書店に流れてきたのではないかと考えられます。それにしても、文庫・新書がこんなにたくさんあるのは驚きです。



二〇〇〇年五月十五日（第54号）

雑誌『本とコンピュータ』第12号（二〇〇〇年夏）で「どこで本を読むのか？」というアンケートを行っています。三十四人のうちで十四人が「おもに電車・飛行機の中」と答え、なかには「電車でしか読まない」という人も何人かいました。答えているのはみな知識人で、公私含め日常的に読書をしている方たちだと思いますが「書斎の机の前で」という人はほとんどいませんでした。

面白いのは乗り物でも「自動車」という答えが皆無なこと。考えてみると、マイカーの場合は自分で運転していれば読めませんし、同乗の場合でも、あの空間というのは何となく世間話でもしないと間がもてません。おまけに不規則に揺れ、夜はだめとなると、これは読書環境ではないようです。そこで、日本（いや世界中）で本が読まれなくなったのは自動車の普及に原因があるという仮説がなりたつようです。

ところで私の読書ももっぱら電車の中です。夢中になって下車駅を乗り過すこともあります。この二十年間くらいほどほとんど読まなかった「小説」が最近面白くなってきました。

前回の続き。私も確かに電車の中で読書はしますが、二人以上で乗車した場合はなんとなく会話をしないとイケないような気になります。電車の中が読書空間になるのはほとんど一人での時に限られます。一人になれば、しかも何もしなくてもすむ空間と時間を所有できることがその理由なのです。車では一人になっても運転という作業があるので完全には自由にはなれません。しかし、音楽やビデオ（ちよつと危険ですが）を楽しむことはできます。完全な集中と一人だけの空間（意識の中でのことですが）——これは本というメディア、読書という作業の特徴を示しているともいえます。

ところで今読んでいるのはウイリアム・フォークナーの『八月の光』（新潮文庫）。古典と呼ぶほど古びてはいませんが、時代は一九三〇年代のアメリカ南部で、人種差別がわからないと意味をなさない話です。最近こうした本格的な小説がますます面白くなってきました。思えば、こうした小説はある程度の年齢にならないと内容を理解し、共感をもって読むことができないのではないかと気がしています。シニア世代になって本当の読書ができると思えます。

二〇〇〇年五月二十九日（第56号）

どこでも激安・価格破壊の話ばかりですが、大量生産できる「モノ」が作り方と流通合理化によって安くできるのは理解できないわけではありません。反対に人間が直接に顧客と接するサービス料金はなかなか激安にはできないものです。

その典型が美容・理容料金でしたが、しかしここでも最近信じ難い料金が出てきました。通常の理容院の散髪料金は四千元〜五千元です。私は、二千元の「激安」店を知っていて、そこをよく利用していたのですが、美容院のカット（のみ）料金の方が安いと聞き、千五百円の店をみつけました。ところが、なんとその激安美容院の近くにカットのみ千円の超激安店がオープンしました。基本的には美容院のようですが、要するに男女問わず髪をカットするので。

このサービス料金の激安競争のキーワードは時間です。四千元〜五千元の店は大体五十分から六十分くらいかかります。二千元の店は約二十分。千五百円の店は十五分。（いずれも実測値！）。そして千円の超激安店には「10分でOK」のキャッチコピーが貼ってあります。まさか協定したわけではないでしょうが、十分千円の時間原価が完全に守られています。ちなみに、ユーザーからすると時間は短いほどいいと思うのですがどうでしょう。

二〇〇〇年六月五日（第57号）

数年前から手元の細かい文字が見にくくなっていったので、メガネを作りました。いわゆる老眼です。もともと近視なのでメガネを外せば近くのもの的小伙伴と見えますからそれほど不便でもなかったのですが、それでも少し離れると見えにくく、読書はもちろん、マニュアルなどの細かい文字やパソコン画面がかすれます。それにしても最近のプロポーションナル文字というやつは本当に読みにくい。

新調したメガネは要するに近視の度合いがやや弱いというものです。一メートルくらいの距離まで焦点が合うので非常に快適です。そこから遠い距離はボケますが、一応弱い近視鏡になっているので何とか日常を過ごせます（もちろん、二つのメガネを切り替えれば完全なのですが）。八ポイントの文字がこんなにくつきり見えるのかと感動ものです。文字を書くのも楽になりました。十代々二十代の頃はこのように小伙伴と見えていたはずですが、いったん不自由を味あわないと自由の価値はわからないものなのです。

二〇〇〇年六月十二日（第58号）

川崎市で市内バスに乗りました。夕刻でやや込み合う車内で二人の老婦人が話しています。どうやら昔話のようで、年上と思しき方が「弟を背負って防火用水の水をかぶって空襲の中を逃げた」「食べるものがなくて雑草を摘んでお粥にした」などといっているうちは車内の人々も冷静だったのですが、そのうちに話がだんだん凄惨になり「上野の山は死人でいっぱいだった」ときて、ついに「うちのほうでは人間を殺して食べたやつがいるのよ」という衝撃の告白になり、バスの乗客も一瞬その老婦人のほうを見やりました。

車内のそんな反応を気にするそぶりもなく二人の話はさらに続いて「人間の肉なんて食べられるんかい」「それが結構おいしいらしいのよ。皮のところ……」（以下の部分聞き取れず。多分声をひそめたのでしょうか）

その衝撃の戦争体験告白者は、バスが駅につくともうひとり夫婦人にあいさつしてすばやく降り、わたしよりも元気な足取りで地下街への階段を下り始めたスーパーパーおばあさんなのでした。

二〇〇〇年六月十九日（第59号）

「ストリート・ミュージシャン」が出没するのは都心部だけかと思っていたら、かなり地方まで波及しているらしい。私が毎日のように利用する自宅近くの駅で、この「ストリート・ミュージシャン」を見かけるようになったのはおそらく一年半くらい前（多分、改装で連絡通路に屋根ができ、地下駐輪場ができてから）だと思います。この駅はJRと私鉄の駅が五十メートルほど離れていて乗り換え客が昼夜をとわず行き交っているので、観客にはこと欠かないのです。

ここに出没するのは、フォーク系（？）の歌を歌う学生風のグループや、民族衣装を着たラテン系の演奏グループといったところ。ラテン系はけっこう人気があります。

付近の人口がどんどん増えているのと大学もあるので、この駅周辺の様相は一年ごとに変貌していくようです。先週できた駅前のビルには「新古書店」がオープンしています。中古CDもあります。本は漫画、文庫、新書、単行本、雑誌と多彩です。文庫、新書は全部一冊百円ですからどんなふうにして利益をあげるのか不思議でなりません。

二〇〇〇年六月二十六日（第60号）

岩根さんの記事にもあるように、六月二十四日（土）に、第三回日本自費出版文化賞の表彰式が行われました。その前に、鎌田慧さんの講演、さらにその前には自費出版ネットワークの総会があり、二日前の二十二日（木）から同じ会場で「東京グラフィックスフェア」が開かれていて、私も含めて自費出版ネットワークの数人の幹事はほとんど連日、有明まで来ていたことになります。

二十四日当日にはちょっとした事件もあって、ッてんやわんやッでしたが、何とか終わりました。表彰式はなかなかよかったと思います。通常の業界関係などのパーティではこんな想いをするとはまずありません。受賞したみなさんは本当にうれしそうで、それこそ一生に一度の喜びという気持ちを表現されたかたもいらっしやいました。仕事柄、たくさんの本や原稿に埋もれてしまっつてつい忘れがちですが、自分のしている仕事が見いだされ、正当に評価されるということは、こんなにうれしく晴れがましいことなのです。

いってみれば一種の「思いつき」で始まったこの日本自費出版文化賞が、これほどの大きな喜びを与える賞になったことをうれしく思うと同時に、いいかげんな仕事をしてはいけないとあらためて思います。

## 二〇〇〇年七月三日（第61号）

オンライン版『本とコンピュータ』で、「一〇〇日議論 人はなぜ、本を読まなくなったのか？」というのをやっています。考えてみれば「なぜ、本を読まなくなったのか」なんていう、われわれ中年が居酒屋でやるような議論が真面目に取り上げられるようになってきたんですね。

この『本とコンピュータ』だけではなく、新聞でも雑誌でも、最近この種の問題が盛んです。もちろん本誌連載の「文化と出版」でも言及されています。もつともどの議論でもいえるのは「本を読まなくなった」のであって「文字を読まなくなった」のではないということ。それどころか、この議論のなかでの投稿文にもみられるように「本は読まなくなったが文字を読む機会は増えている」というひとが多い。これはいうまでもなくコンピュータで生産される文字が急激に増えていることに原因があります。

本を読まない若者でも電子メールやホームページの中の「文字」を麻薬のように浴びています。また内容はともかく文字を打ち込んでいます。文字に対する関心はかつてないほど高いというひともいます。これは一体なんでしょうか。



二〇〇〇年七月十日（第62号）

七月七日から八日にかけて関東地方をかすめた台風三号の影響で、多くの中小河川が氾濫しました。私の家の近くでも床上浸水があり、ちよつとした避難騒ぎもあつたようです。翌日の夕方、川原にいくとまだ通常より一メートル以上水位が高く流れも急です。草がなぎ倒され、いろいろなものが堤防に打ち上げられています。

河川漂着学を誕生させようかといろいろ見てみましたが、ほとんどが飲料用の缶やペットボトルで、すぐに断念。六十cmくらいのコイの死骸と真新しい赤いランドセルが印象的でした。

今回から今田欣一さんの『私の自費出版体験』を掲載します。今田さんの本職はタイプフェイスデザイナーで、今年六月、『タイプフェイス・デザイン事始』という本をオンデマンド方式で出版されました。それ以前にも自費出版体験があり、その経験を執筆していただきます。

NHKスペシャルの「古代文明」に便乗するわけではありませんが、二十世紀の終わりという時代を迎えて、人間の歴史と文化への関心が一段と高まっているようです。普段の生活の中では些細なことに一喜一憂してそれなりに充実感を持った気のする私たちですが、ちよつと視点を高くしてみれば、その生活の底がいかに浅く、根のないものであるかは驚くほどです。

考えてみれば、現代の私たちの生活の基礎となっている技術はたかだか近代百数十年の間に生まれたものがほとんどです。それ以前の生活は三千年以上前の生活と基本的には変わっていないかとたとえいえそうです。それでは人間の感情はどうかというと、最近、十八世紀、十九世紀の（外国）小説を読んでいます。人間の感情（特に恋愛、憎悪、嫉妬など）なんていうのはほとんど変わっていないことに気がつきます。

つまり、おそろしく変わりつつある背景の中で、相も変わらぬ人間が右往左往しているのが現代なのでしょう。混沌は深まるばかりです。

二〇〇〇年七月二十四日（第64号）

前にも触れた六月二十四日の第三回日本自費出版文化賞の表彰式での受賞者の方のあいさつ。皆さん大変おもしろかったのですが、残念ながら録音・記録がなく、残すことができませんでした。そこで、後追いではありますが、受賞者の皆さんに原稿をお願いしました。到着した三人の方の原稿から率直な喜び伝わってきました。特に佐合真式さん（文芸部門受賞）の文章は、受賞をめぐっての家族の情愛が感じられる掌編でした。

暦どおりの大暑の昨日、朝、ひき肉入りのカレーライス、昼、にんにくスパゲッティ、夜、ビールを飲みながらトンカツと食べまくりました。こんなにカロリーを摂ることはめったにありません。

さすがに真夏の日中はあまり行きませんが、朝夕に散歩をする新河岸川という小河川の河川敷に、いわゆる遊水地ができたのは七、八年くらい前だと思えます。ちょうどそのころから建設省の河川改修工事に変化が生まれていて、この遊水地もそれまでのようにコンクリートの護岸ではなく、また池内の一部でも人為的な草取り作業をしないで野草が生えるままにされています。

もちろん遊水地ですから大雨が降れば水没しますが、低い部分には葦あしが生え、蒲がまの穂も見られるようになりました。いまでは夏になってこの近くを通るとギーギーと嘖ささやるヨシキリの声が必ず聞こえます。この鳥の声はいかにも真夏の熱気が似合い、黒坂さんの「俳句入門」にも登場するように夏の季語というのがよくわかります。

二〇〇〇年八月七日（第66号）

自宅から歩いて五分くらいのところにな新しくスポーツクラブができたので中断していた水泳を再開することにしました。クラブの設備は最新式。ロッカーも磁気カード方式による暗証番号での開閉ですし、プールはオーバーフロー方式の大変泳ぎやすいものですが、利用者は案外少ないようでした。

聞くところによると、私のいった日曜の午後よりも平日の夜の方が利用者は多いとのこと。どうも仕事帰りにここによつて、プールに入ったり、さまざまなお風呂やサウナを利用していらっしゃるのです。平日の夜のみのコースもあり、昔の銭湯の雰囲気ですね。

二〇〇〇年八月十四日（第67号）

本誌発行以来、巻頭に掲載されている「文化と出版（最初は自費出版文化論）」が今回で終了します。当初、表題のように自費出版をめぐるさまざまな問題を扱っていたのですが、自費出版の隆盛が実は出版界の衰退と表裏の問題ということで話題は大きくなり、日本の出版システム、流通システム、さらにその根底にある「読書」という「文化」まで論じることになりました。

この間、いろいろな人からご意見・ご感想をうかがいました。私自身も毎回どんなことを書いてくるのか楽しみでした。本来、この「MyBook」は面白い、価値のある自費出版物を紹介するのが目的のひとつで、柴野さんには「書評」を担当してもらうことになっていました。別な意味で再登場していただく予定ですが、なにせ頑固反動の柴野氏のこと、どんな本を紹介してくるのか注目です。

二〇〇〇年八月二十八日（第68号）

「統計でウソをつく方法」というのがありますが、八月二十四日の朝日新聞夕刊に載った広田照幸氏の一文『メディアと「青少年凶悪化」幻想』はまさにこうしたことをあらためて考えさせるものでした。内容を簡単に紹介すると「最近マスコミなどで盛んに騒がれている『青少年の凶悪化』は事実と反している。実際には年少少年の犯罪数も少年の粗暴犯罪数も過去に比べてはるかに減少している。成人や中間少年の検挙数がそれ以上に減ったため、割合が増えたにすぎない。警察庁が意図的に発表する数字を鵜呑みにしたり、例外的に起こる重大事件を不必要なまでに報道するメディアのあり方を反省すべきである」というものです。

この意見の妥当性を確認したわけではありませんが、おそらく真実をついていると思います。日頃、私たちが社会や政治のことを理解したり批判したりするにはマスメディアの報道に頼る以外にありません。しかしこのマスメディアが冷静さを欠く報道合戦にあけくれている状況では、このような事実にもとづいた専門家の意見を聞くことがありません

前回で終わった柴野氏の連載のような後書になってしまいました。しかし、世の中には少数意見をもった小さなメディアが（たくさん）必要だとあらためて思います。

二〜三週間、完全な形で発行ができませんでした。用事が重なったためですが、おかげで何人かの方からお便りや連絡をいただきました。私の普段の仕事であるシステム開発・メンテナンスというのは、順調なときは連絡がなく、おかしくなると電話をしてくるのが普通ですが、雑誌の発行も同じようなものです。

といっても別に苦情をいただいたわけではなく（なにせ無料という強みがあります）激励の類です。いうまでもなく、この雑誌は毎回原稿を書いてくれる人たちの協力でなりたっています。その方々も最近が多忙なようで、一体わたしたちはいつになったら「忙しさ」から開放されるのでしょうか。『眠れぬ夜のために』で有名なカール・ヒルティの著作を読むとどうやら百年前の人達も「時間がない。忙しい」といつていたようで、ヒルティは「時間を作る方法」などを講演しています。それによると「時間を作る有効な方法は無駄なことをしないこと」で、その無駄とは「ビールを飲むこと、新聞を読むこと、会合に出席すること」だそうです。



二〇〇〇年九月十八日（第70号）

「文化と出版」の外伝はじめ今回は久しぶりの記事満載です。先週の東海地方豪雨で新幹線に四時間も閉じ込められた岩根さんはこの三連休はすべて仕事だったそうです。私も一日休むつもりが結局、プログラミングと原稿書きに終わってしまいました（SQL操作がなんとかできるようになりました）。

テレビでのスポーツ観戦はきらいではないのですが、最近のオリンピックや国際大会の報道ぶりにはちよつと嫌気が差します。ビッグビジネスになったことは誰もが知っていながら、建前では（いっけんそれとは無関係な）感動や純真さを演出しなければならぬような偽善的なシステムがいつまで続くのでしょうか。

二〇〇〇年九月二十五日（第71号）

豆の木工房・村上さんのホームページ「元氣が出るページ」では九月十五日（金）より画家、渡辺遵氏のエッセー集「山椒庵日記」を週一回更新で三十回連載しています。この本は前回の日本自費出版文化賞の個人誌部門で入選だった作品です。ぜひご覧ください。

一時のブームが終わったインターネットですが、「元氣が出るページ」に限らず、高い内容を継続しているページがいくつもあります。長期間にわたって続けるだけでも大変ですが、質を維持していくことはもっとむずかしい。静かに絶え間なく燃える情熱が必要です。価値ある仕事は静寂と孤独の中からしか生まれれないのだと感じます。

二〇〇〇年十月二日（第72号）

「MyBook」への寄稿は大変ありがたいことなのですが、掲載できないうちに手元に（パソコンの中に？）溜まってしまいました。おなじみの松井氏の「旅」シリーズの最新作。以前にご執筆いただいた喜田さんからもまたまた面白い原稿をいただきました。裁判に関する自著発行の経緯を書いていたいただいた原稿も送っていただきました。

もともとメールマガジンとして長すぎるという定評のある本誌なので、調整しながら発行していくしかありません。著者の皆さんももう少しお待ちください。来週は少し余裕ができそうです。

先週の朝日新聞文化欄に作家眉村卓氏が「中年になって若いころと本の味わい方が変わったのが分かる」という趣旨の小文を寄せています。昔読んで感激した箇所にも感じず、逆に思いもかけなかったことに深い意味を感じる——こんな経験は私にもあり、「本物の小説は年を経て味わいがわかる」ということを実感しています。人間の感受性は年齢とともに衰えるのではなく変化するだけだということはかなりの真実がありそうです。

秋の空が青く美しいという

ただそれだけで

何かしらいいことがありそうな気がする

そんなときはないか

（黒田三郎「ある日ある

時」より）

こんな詩も、若いころは単純すぎるような気がして面白く感じなかったかもしれません。しかし今はこういう、わかりやすく、しかも世俗に流されない表現がいかに難しく、奥が深いかが何となく分かるのです。

二〇〇〇年十月十六日（第74号）

「さあ困った。進退窮まった」という体験はどのくらいあるものでしょう。交通事故などの肉体的な危機ではなく精神的なものです。私の場合、幸いなことに家庭生活においてはいままであまりそうしたことはなかったように思いますが、仕事（というか家庭外）に関しては何回かそうしたことがあります。

時間的にはほんの数時間だったこともあれば数週間悩んだこともあります。振り返ってみると、ほとんどの場合、誰にも頼れず（話せず）、しかも出口が見つかからないという状況が似ています。永久に続くのではないかという逃げ場のない焦燥感——これが一番つらいところです。そんな状況にあっても快活にふるまうことは私にはできそうもありません。

先日のNHKテレビ番組「クローズアップ現代」が自分史のことを取り上げていました。別の作業をしていて半分くらいを横目に見ただけなのですが、作家の瀬戸内寂聴さんが自分史を書く人たちの心情を語り、第二回自費出版文化賞の個人史部門賞を受賞した赤石さんや大阪の福山琢磨氏が出ているのが分かりました。

気になるのは、瀬戸内さんが自分史を「懺悔<sup>さんげ</sup>」とか「痛切な思いの表現」であるというようなことをいつていたこと。もちろんそうした自分史も多く、番組ではそうした自分史にスポットを当てたのかもしれませんが、現在書かれている自分史にはそうした思いとは無関係な、もつと楽しい内容も多いのです。

もうひとつ、番組のキャスターが最後に「日本では年間三万点ほどの自費出版があるが、そのほとんどが自分史」といつていたこと。実は自費出版ネットワークの関係者にもNHKから取材があつたそうで「自費出版のほとんどが自分史ということはありません」と答えていたのですが、結局は向こうの思い込みどおりに放送されたようです。

二〇〇〇年十月三十日（第76号）

先週の二十七日に突然大量のEメールが送られてくるようになりました。「Print」という印刷関係の団体（東印産協）が作っている連絡機関が窓口のメーリングリストのようです。私は東京グラフィックサービス工業会という団体に入っているのでそこから連絡されたのだと思いますが、どうもこのメーリングリストの管理者がシステムをよく理解していないようで、説明用のホームページも入退会の方法も示されていません。

さらに私同様に、ちゃんとした入会手続きをしていないのに参加者にされてしまった方がたくさんいたようで、しかも、その削除要求や内容説明を求めるメールがこのメーリングリストを通じて送られ、その釈明や、さらにそれを「自己管理能力のなさ」と指摘するメールも飛びかい大混乱。結局、二十九日には配送が打ち切られたようです。東京都もからんでいるようで、サーバは東京都庁内におかれているようです。担当職員は今日出勤して大慌てでしょう。

前回の「後書」に書いたNHKの番組について岡田さんから投稿をいただきました。また「サンデー毎日」の最近号に「意外に楽しい四十代からの『自分史作り』」という記事が掲載され、京都のかもがわ出版や滋賀のサンライズ出版などが紹介されているそうです。まだまだ続く自分史ブーム。

最近一日中外出する機会が多く、電話やスケジュール管理が机の上でできなくなりました。特に、手帳に書く電話を追加・修正したり、それをまたパソコンに入力したりというのが大変（おまけに私の手帳はよく行方不明になります！）ということ、最近はやりのPalmと呼ばれる携帯型の情報機器を買いました。

最も安価な（二万円弱）ものですが、アドレス帳と電卓のかわりになればという程度でしたが、その高機能なことには驚きました。昔の電子手帳とは違います。アドレスに数百人分、メモ帳に八万文字（日本語）以上を入れてもまだまだ余裕。予定表も含めて、それらを任意の文字（日本語）で検索できます。メモ帳機能では画面での“読書”も可能ですし、これが売りのパソコンデーターとのシンクロ（同期）も、一度設定してしまえば次からは本体のボタンを押すだけです。

ペンでタップ（叩いて）してのインターフェイスですが、使い方は簡単。やたらに高機能になって遅くなっているパソコンの反対としてこうした簡単な道具が出てきたのでしょうか。これが携帯電話と一体になって表示画面がもっと見やすくなれば恐るべきものになるとみました。



二〇〇〇年十一月二十日（第78号）

第四回日本自費出版文化賞の受付が始まって一か月半になりました。例年通り興味深い書籍が送られてきています。しかし、今回は昨年までと比べて応募数が全体に少ないように感じられます。

もちろん、こういう賞はただ応募数が多ければいいというものではありませんし、寄せられた中での優秀作品を審査すればいいのだという考えかたもあるでしょう。しかし、主催者としてはやや残念な気がします。自費出版自体は依然として盛んなようであり、注目も集まっています。賞金の額や入賞者ばかりが華やかに取り上げられますが、この文化賞も「記録を残す」という本来の趣旨を思い起こす時期なのかもしれません。

二〇〇〇年十一月二十七日（第79号）

なんと月曜日の午前中に編集を開始して、午前中に配信を終わるといふ「MyBook」史上初めて（多分）の拙速出版になってしまいました。いくら早いのがいいといってもこれはいけません。一晩寝かせてから落ち着いて見ないと原稿の間違ひは発見できないからです。急用ができるとうこうなるのがつらいところです。

ところで、いま自費出版ホームページに掲載する本の写真をスキャナでたくさん撮っています。私は大概、本の「帯」ははずして撮影するのですが、いいのでしょうか。当然、本の装丁、デザインは「帯」などの存在を考えないで（はずした状態で見られるということ为前提に）作られていると思いますし、あれはただの宣伝用の飾りだとみなしているからです。

ほとんど書店で平積みされることなどない自費出版物に立派な「帯」の意味があるのかとも思いますが、中にはよくできたものもあり、はずすとなんだか貧相に見えたりして迷うことがあります。

二〇〇〇年十二月四日（第80号）

先週号で岩根さんから頂いていた原稿（電子メール）をうっかり忘れてしまうというミスをしてしまいました。申し訳ありません。

言い訳ではありませんが、最近ますます電子メールの受信数が増えています。私の場合はメールマガジンの発行やいくつかのメーリングリストの主催者、自費出版ネットワークの連絡用IDにもなっていますので、その事務連絡も結構ありますが、DMメールもバカにならない数でやってきます。

こちらが要求しないのにやってくるメールを集めて傾向を分析してやろうと思っていたのですが、アダルト系とお金儲け系（詐欺系？）がほとんどで、あまり意味があるようには感じられません。

こちらのホームページも見て連絡を送ってくれる人もあり、「インターネットで検索し自費出版ホームページを拝見しまして送らせていただきました。日々、本創りという創造的なお仕事をしていたらっしやり、大変共感いたします」などと書いてあると情がうつります。高句麗の王族の子孫という方のコンサートのお知らせなのですが、内容がちよっと？なのでお知らせしないことにしました。

先日の『日経PC21』に続いて、マガジンマガジン社から同じく『自分史ムック』がやはり来年一月に出るそうです。自費出版ホームページの紹介をしていただけでありがたいことですが、同じような「壮年向きのパソコン利用とからめた自分史作りのムック」ということになり、出版社の発想も案外オリジナリテイがないものです。

いよいよ二十一世紀がやってきますが、出版関係で考えられるテーマは（もう始まっていますが）二十一世紀の予測と二十世紀の回想です。特に二十世紀は間違いなく人類史上最大の事件がいくつも起こった時代で、しかもその当事者がまだ健在ということですから、この時代の記録は文化的に重要なテーマになり、出版界でもほうっておくことは考えられません。

自費出版ネットワークでも、「歴史の記録」というような大上段ではなく、ごく狭い世界に生きた庶民の生活や文化の記録を残すような運動をやりたいと考えています。すでにこうしたことを企画しているひとたちもあり、なるべく大きな運動にしたいものです。

二〇〇〇年十二月十八日（第82号）

今回も「二十世紀の記録」についてですが、これを「二十世紀の生活記録」としてみると、単に過去を記録するという歴史的な興味だけでなく、これからの生活に必要な指針が見つかるような気がします。

例えば『粗食のすすめ』（幕内秀夫）という本によると、日本人の食生活が大きく変わったのは昭和三十年前後だということです。四十五年前のことで、私などにもある程度理解できる範囲です。つまりこの前後から日本人は肉、牛乳、油脂製品、輸入食品を食べるようになっていくのです。そしてその裏には昭和三十一年に結ばれた「米国余剰農産物に関する日米協定」があり、われわれが飲んだあの、まずい「脱脂粉乳」の正体もこの辺にあるのでしょう。

しかし、こうして進められた欧米食の普及が日本人を心身ともに幸福にしたといえないことは確かで、これを見直すために昭和三十年以前の食生活や生活習慣が参考にされはじめています。過去の記録は単なるノスタルジアではないことの証明です。

二〇〇〇年十二月二十五日（第83号）

またまた前回からの続き。「二十世紀の記録」のような雑誌の特集、ムックなどがたくさん出ています。私もついつい一冊買っ  
てしまいました。『二十世紀 一〇〇年の物語』（毎日新聞社）。  
新聞社らしく、一ページに一つの写真が掲載されてその年を象徴  
し、それらの総和が時代を映し出すという構成になっています。

内容や記事のことはともかく、ここで思うのは、二十世紀は写  
真で記録されているということ。これも人類史上初めてのこ  
とで、歴史の証言から何気ない日常の一コマまで、事実を前にし  
た写真というものの雄弁さは疑いようがありません。

写真どころか、現在は映像があふれかえり、貴重な記録という  
感覚さえありません。もらった写真の保存さえ忘れていきます。古  
いアルバムに眠っている過去の写真をよみがえらせることをやっ  
てみたいという気がします。

二〇〇一年一月八日（第84号）

今日が、今年初めての「MyBook」となります。昨日から全国的に雪模様で今朝は東京地方にも十〜十五センチの積雪があり、思わぬ（車の）雪下ろしなどを手伝わされてしまいました。

今年は新年早々に、探していた『昆虫記』（岩波文庫）の七巻から十巻までが近くの書店でみづかり幸先がよさそうです。いうまでもなくファアールの名著ですが、岩波文庫の完訳版は一九九三年に初版発行です。六巻まで購入していた書店のレイアウトが変更になり、岩波文庫は数分の一のスペースに減少、『昆虫記』は消えていました。

それなら今はやりのオンライン書店でと検索してみました。なんと「在庫切れ」の表示。まさかそんなに売れるわけがないので増刷も簡単ではないでしょう。これは書店をしらみつぶしに調べないとだめなのかと思っていた矢先でした。それにしてもオンライン書店とはこんなにオーソドックスな古典も簡単に手に入らないものなのでしょうか。これは面白いですよと宣伝している本だけが買えるのなら実際の書店と同じになってしまいます。

二〇〇一年一月十五日（第85号）

本誌にも何度か登場している季刊誌『本とコンピュータ』はいつも（関心のあるものにとつては）興味深い内容が盛りだくさんですが、先週発行の「二〇〇一冬号」にも『本にも複数の出口があったほうがいい』（津野海太郎）や座談会『「活字消滅論」に反対する』など、重要な提案を含む記事が掲載されています。

とはいえ全体のテーマが「二一世紀、本はどうなる」という漠然としたというか、根本的な問いかけなので、毎度のことながら一つの結論が出せるわけではありません。また、この雑誌は四年前に「四年で終了する」と宣言して発刊されたものです。次号がその時にあたるわけですが終了はしないで「第二期」という形で継続されるようです。

四年間という時間は長いようでも短いものです。私の感想では、この四年間に（例えば「本とコンピュータ」をめぐる問題ひとつとっても）根本的に状況が大きく変わったという気はしません。この間の情報通信技術の発達とは裏腹に、むしろ伝統的な文化や生活習慣の強さ・しぶとさが分かったという感じさえします。



二〇〇一年一月二十二日（第86号）

最近、次のような問い合わせがきました。

「初めまして。私は久坂玄瑞という幕末の志士を個人的に調べている者なのですが、自費出版と思われる二冊の本の入手に苦労しています。一冊は「久坂玄機・玄瑞兄弟」（岡崎兵衛著、もう一冊は「久坂家略伝」（久坂恵一著）です。普通の書店ではおそらく流通しませんし、古書店等でも検索にひっかかりません。後者の方は、国会図書館に所蔵を確認しましたが、できればどちらも入手したいと思っています。自費出版図書館にも所蔵がなかったようなのですが、こういった場合、いったいどうしたら自費出版の本を入手することが可能でしょうか？」

実は以前にも、同じような問い合わせを何件かいただいたことがあります。しかしながら国会図書館にもない本の行方となるとどう調べていいのか皆目見当もつきません。お答えができません。まになって実にいやな気分でした。ご存知の方がいたら教えてください。

自費出版ネットワークやホームページなどと名乗っていれば、尋ねてみようと思うのは当然です。インターネットではサーチエンジン全盛の世の中ですが、ものによっては過剰と思えるほどの情報が提供されるのに対して、出てこない情報は徹底的に出てこないのがこのシステムです。

本誌82号の柴野氏の連載で言及されている野口悠紀夫教授の「インターネットは断片的な知識を提供するに過ぎず、体系的な思考能力を身につけさせることができない」と同じことかもしれないませんが、もともと入っている情報を探す技術なんて所詮ゲームと同じです。逆にインターネットで出てこない情報の一覧を作つて、それを“足”で調べさせ、インターネットに登録するのなら十分教育の一環になりそうです。

さらに、今号で今田氏も述べているように、インターネットの世界をはずれると小さな情報を流通させるのは現在でも予想以上に難しいものです。

先週の土、日に自費出版ネットワークの「全国交流会」があり、琵琶湖のほとりに行ってきました。いつものように大変楽しい集まりでしたが、研修会で講演した京都のナカニシヤ出版の中西さんが「確かに書店で本は売れないが、よく言われているような「活字離れ」があるとは思えない」と語っていたのが印象に残りました。

この交流会の前日、またNHKが自費出版のことをとりあげていたそうで、特に「文芸社」のことを取材していたそうです。その後も、日経新聞や朝日新聞が自費出版のことを記事にしています。自費出版文化賞などもとりあげてくれているので文句をいえません、なんでみんな、あの「文芸社」ばかり取り上げるんでしょうか？ こんなに持ち上げられては、何を持ち込んでも「共同出版」といつてよこすこの会社がブランドになってしまう恐れもあります。皆さんはどう思います。

小学生のころ、『動物記・博物記・昆虫記』という本を読み、その中でファーブルを知りました。その中に出てくるファーブルの少年時代のアヒルを連れての小さな沼の思い出や水槽を作って水棲昆虫の生態を観察する記述は私を夢中にさせました。ただし、漢字ばかりの当時の岩波文庫版の本物の『昆虫記』には手が出ず、長いこと読みたいと思いながらそのままでした。

昨年あたりからこの『昆虫記』を時間を見つけて読んでいたのですが、七巻までいって、とうとう「沼」の章にいきました。残念ながら子供のころの感動は再現しませんが、あのころ手がでなかった几帳面な『昆虫記』の文章を時間をかけて楽しむようになりました。

二〇〇一年二月十二日（第88号）

貴重な三連休でしたがあつという間に過ぎてしまいました。最近「限りある地球資源」というのが流行語ですが、ひとりひとりの人間が持っている時間も有限なのです。といって少しづつ使ったり再利用できないのがこの資源で、おまけに「残り資源量」がある程度予想できるようになると、目の前で無駄に使われるこの時間資源の浪費が無闇に気になり、気が付くと「ブラブラしないでちゃんと働いたらどうだ」などと小言をいう大人になっていきます。もちろん自分の時間資源が無限だと思っているノーテンキな若者はこんな意見をきき入れませんが。

私はまだ老人ではないつもりなので、かなり気が長いとは思いますが。また「明日のために今日の苦勞は無駄でもいい」というような考えは持つていませんが、実際には「仕事」や「近所付合」などで後悔することが多く、こうした不毛の時間を最小にする生き方を心がけるしかありません。こんなわけのわからないことを考えるのも時間に余裕があるからでしょうか。

次回から、自費出版ネットワーク幹事の座談会を連載で掲載します。今年一月の自費出版ネットワーク全国交流会でお世話になった斎藤治さんの論考も掲載のお願いをしています。ご期待ください。

## 二〇〇一年二月十九日（第89号）

「E-Magazine NEWS」というメールマガジンが毎週何回か送られてきます。メールマガジンの発行者や興味のあるひとを対象にしているようで、読者は五十万人とのこと。相変わらずメールマガジンの新規発行者は多いようで、もはや一時のブームとは呼べないでしょう。もちろん、途中で発行を止めてしまう場合も多いでしょうから、大変な新陳代謝が起こっているわけで、もう誰も全貌をつかめない巨大メディアになっているような気がします。

ちなみに今日来た号に紹介されているメールマガジンは以下の通り（略）です。この号だけでも硬いものからかなりナンパなものまでにぎやかです。ちなみに最近のメルマガ発行サイトではアダルト系は掲載しないことになったようで、そのかわりDMメールがやたらに送られてきます。「クワ太郎」というのはクワガタの飼育情報のように面白そうですね。

二〇〇一年二月二十六日(第90号)

以前、本誌「MyBook」に「『愛知県岡崎地方史関係文献目録』完成まで」と題する原稿を連載していただいた小林清司さんが、その後の研究成果をまとめ、新たに『愛知県岡崎地方史文献総覧―岡崎の文化―珠玉の郷土資料』を出版しました(二〇〇一年二月、A4判、一四二ページ)。

前回同様の自費出版ですが、小林さんは、前記の文章の中にもあるように、現在は図書館以外の部署に異動となり、日常的に文献を扱う立場にないようで、土曜、日曜に資料を読み、「書評」という形で時間をかけて記録したそうです。「書評」なので、読んでも面白い内容ですが、逆にいうとこれは個人のボランティア活動しかできないような類の仕事なのかもしれないと思います。

もちろん、こうした、自分の利益に結びつかない、しかも公共性の高い仕事には公共の資金が使われていいのかも知れません。しかし、おそらく公的資金を使ったとたんに、この仕事は「義務」に代わり、有象無象の圧力が加わって、そこには個人の意欲を高めるような「自由な仕事」の要素は無くなってしまいうようにも思います。

小林さんもその辺は分かっているようで、この本のあとがきで「人生はひとそれぞれ、歴史の中に埋没していくのが一般であるが、生きた証としてこのような仕事が残せることはまことにあり

がたいことである」と書いています。

今回の本が、自身の手製と思われる版画をいれたり、布巻き箱入りという、趣味性豊かな形に仕上がっていることにも、そのこととはあらわれているように思います。やりたいことがみつきり、それができるといふのは本当に幸せなことです。



二〇〇一年三月五日（第91号）

風邪をひいていたので、この週末は市長選挙の投票に出かけた以外はほとんど外に出ないで事務所にこもっていました。今年に入ってから二回も風邪をひいています。特に熱が下がった後に咳が出るというのはこれまであまりないことでした。いよいよ体力が低下してきたのでしょうか。

先月、軽印刷業界の重鎮、丸井工文社の今井正作氏が亡くなったという連絡が所属する業界団体からありました。かつて、いろいろなことで私もお世話になり、また話をしていると大変に面白い方でしたが、よく「歳をとると風邪をひきやすくなるんだよ」といつていたのを思い出しました。当時の今井氏はまだ六十歳代前半だったと思います。

風邪が治まるといよいよ花粉症の季節です。受難の春はまだ続きます。

今回から『自費出版と流通―ささやかな経験と私の考え方』を執筆していただいている斉藤治さんは京都の自費出版会社として業界（？）では有名な株式会社ウインかもがわの編集責任者です。

先般の滋賀県での自費出版ネットワークの全国交流会の折にお目にかかり、強引に「MyBook」への寄稿をお願いしたものです。その後、東京に行く用事があるからということで新宿でお話する機会がありました。東京では、五日間、直接の作業を離れてさまよい歩いたようで、こういうことを年に一〜二回やるのだそうです。

この原稿についても「意見を聞かせてほしい」という但し書きがついているのですが、私の経験ではとても意見をいう資格もないので、とりあえず連載を開始してしまいました。申しわけありません。「本を売りたい。書店にならべてほしい」という連絡は私の元にもたくさん来ますが、今のところ答えようがありません。皆さんの意見を聞かせてください。

二〇〇一年三月十九日（第93号）

今号の連載座談会で話題になっている「二十世紀の記録」は自費出版ネットワークの新しい共同企画として準備を進めています。一昨日の土曜日にも数人の有志が集まってにぎやかに議論をしました。

論議というか話し合いをしていくなかで、この企画は当初の考えから発展してユニークなものになると思います。それは、共通の理念のもとに「記録」を募集して編集し全体として日本の庶民レベルでの二十世紀の詳細な生活の実態を後世に残すデータベースを作ろうということだからです。「二十世紀の万葉集」というような例えも出ています。もちろん自費出版ネットワークの会員が主体として参加するのですから、その記録の多くは「記録集」として出版されると思いますが「出版」自体が目的ではないという事です。

とするとこの企画は一種の文化運動みたいなことになりましたが、もちろんそうです。しかし、参加していただく出版、印刷会社の方から見ると、この企画がニュースになればなるほど、ある程度の宣伝効果が期待できます。具体的な方法は各社で考えてもらうとして、そもそもこういうインセンティブがなければ参加してもらうことができないと思います。出版や印刷は常に「文化とビジネスの接点」にいるのだと思います。

周りの人に聞いてみると意外に「本はあまり買わない」という人が多い（雑誌や業務などで購入した本は除外してですが）。意外にはなく、そんなものかもしれない。私も何らかの意味で現在の仕事に関係する書籍は別にして、純粹に興味を持って買う本というのはそれほど多くはありません。

日頃、出版や印刷の世界の中で、本が売れないとか若いやつが本を読まないとかいっているわけですが、細かい文字を見にくくなった熟年世代もしっかりと本離れしてきたのかもしれない。そんななかで最近、純粹に興味を惹かれて衝動買いした一冊が『水の自然史』（河出書房新社）。カナダのナチュラリストが書いたまったくの自然科学系学術啓蒙書です。

私はもともと地下水と河川の関係とか湖沼や丘陵がどうしてできたかといった自然地理学に興味があるのですが（詳しくいうと小地形）、この本も、もちろんその内容が純学術的でありながら分かりやすく書かれているということが購入の基本です。ただし、フランス装の軽めのブックデザインも気に入った理由の一つで、これがハードカバー箱入りといういかにも専門書みたいな形をしていたら手にとることもなかったかもしれない。書籍の魅力は装丁と内容が一体になっていることをあらためて思いました。

二〇〇一年四月二日（第95号）

自費出版ネットワークが主管している第四回日本自費出版文化賞の第二次審査が三週間後に迫り、審査委員を受けていただいた方からの「審査結果」が続々事務局に送られています。私の受け持ち分はいつものことながら、インターネット登録分で事務局に送れなかったものなので、冊数も内容も結構多いですが、とはいえ（どの審査員の方も同じでしょうが）大変なのは「文学」それも小説です。理由はいうまでもなく、そのボリュームです。

今年も、さまざまな小説があります。地域の歴史に題材をとった歴史小説あり、本格推理小説あり、大正から現代まで数代にわたる人々の生活を描いた労作あり、自分史との微妙な距離を保った自伝小説あり、ウィットに富んだショートショートあり——とさまざまです。

昨日は一日、こうした小説を読んできましたが、これは時間がかかります。自費出版といえども、多くの方は同人誌などで腕を磨いて一冊の本にまとめた方々です。力量はとも高く、端的に言えば面白く読めるのです。推理小説などは読み始めると、ある程度審査のめどがついても途中でやめられないものがあります。今までの入賞作を見ると、歴史小説や推理小説などが入賞することとはなさそうですが、純文学も大衆小説も詩もさらにエッセイも含めて評価するところに無理があるのでしょうか。

昨日、通信教育卒業生の同窓会というユニークな集まりの総会があり、恒例となっている記念講演で法政大学名誉教授の安岡昭男氏（近代史）から“埼玉県の知られざる偉人”として清水卯三郎の話がありました。

埼玉県羽生市出身のこの清水卯三郎という人物は勝海舟や福沢諭吉などと同時代に生きたいわゆる幕末明治の人物のひとりで、薩英戦争で活躍したり、パリ万国博覧会に出品、渡欧して石版印刷機を持ち帰って、帰国後に日本で始めての石版での印刷や科学書・農業科学の翻訳出版、歯科器具の輸入や歯科雑誌の創刊、かなもじ普及運動などかなり多方面にわたる活躍をした人のようです。

故郷の羽生市では最近「郷土の偉人」として記念碑を建てたり、無縁仏として遺棄されそうになった墓を地元に移設したりしているようですが、全国的にはもちろん、埼玉県のひとでもまず知らない人物です。

直系の子孫が絶えていることや彼の設立した企業が大きく発展しなかったことなどが忘れられてしまった理由のようですが、幸いなことに彼は『わがよのき』という、持論の「かなもじ わかちがき」で書いた自叙伝を残しており、これを発見した郷土史研究者により研究書が出版され（昭和四十五年）、世に紹介されるよ

うになったということ です。

一般的に政治家や学者は業績がわかりやすいだけに歴史の中に名を残すことができますが、実業家と呼ばれる「民間人」は、設立した企業の発展がないと簡単に忘れられてしまうようです。しかし、実際の世界はこうした人を含めて、無数の名も無き人々がつくってきたものです。

清水卯三郎には、出版した自叙伝や翻訳書が残り、これが見る目をもった後世のひとに再発見されたのです。現代の「自分史」とは違うかもしれませんが、自分の生きてきた道や研究した成果を残しておく意義の一端はこんなところにもあるような気がします。

二〇〇一年四月三十日（第97号）

二週間発行を休んでいる間に、桜の花が散り、あつという間に木々の葉が成長して、その中をツバメが飛び交う新緑の季節に移行しました。この時期の自然の驚異は、毎年のことながらただただ感動して眺める以外にありません。

先週はそんな新緑の八王子の丘陵中腹にある「民家」で自費出版文化賞の第二次審査会が開かれ、第四回の入選作品（五十七点）が決まりました。さすがに四回目ともなると「審査なれ」するのか、結構リラックスした雰囲気で、思ったより早く審査が終了しました。最初の頃に比べて「大作」が少ないなどの意見もありますが、私は賞というのは、集まった中の比較でいいものを選ぶものだと思います。

すでに「本」になったものの審査ですから、そんなに世の中が仰天するようなものはないかもしれません。しかし、どの一冊をとっても、その裏にさまざまドラマがあることは確かです。本の流通や出版の未来をめぐる論議がさかんですが、出版文化を支えているのがこうした表現意欲に満ちた無数の人たちの思いであることは何度言ってもいいと思います。





3年目

2001年5月～2002年4月

二〇〇一年五月七日（第98号）

最近はコミックスという言い方が普通ですが、我が家で定期購読している漫画雑誌は『ビッグコミックオリジナル』（小学館）だけです。この雑誌には「浮浪雲」や「あぶさん」などの古典的作品から「釣りバカ日誌」「龍」「黄昏流星群」など最近の人気作まで水準以上の作品が目白押しで毎回楽しませていただいています。

昭和三十年代の日常生活を描いた「三丁目の夕日」やシニア世代の性を扱った「黄昏流星群」などの連載を考えると、この雑誌の読者は四十〜五十歳台が中心のようです。通常の雑誌から見ると広告も少ないですから、おそらく販売収益が主たる収入になっていると思いますし、書籍の売上が減少している中ではこのようなコミックスが現在の（小学館のような大企業であれ）出版社の屋台骨を支えているのは間違いないでしょう。

この雑誌の最新号巻末に「わたしたちは新古書店でのコミックスの売買に反対します」という硬い内容の緊急アピールが掲載されています。ちばてつや、さいとうたかお、藤子不二雄<sup>A</sup>などの大家が呼びかけ人になった「二一世紀のコミック作家の著作権を考える会」が発表したものです。

確かにこのアピール文がいうように「新古書店での売買が日本の漫画文化を衰退させる」こともあるとは思いますが、同時に小学館が「新古書店はコミックで生きている出版社の経営を衰退させる」と考えていることも確かでしょう。

そういえば、この雑誌の最近の人気作「壁ぎわ税務官」の前号では新古書店と新刊書店がグルになっての脱税がテーマになっていました。「新古書店」に関して、作る側にはかなりの危機意識があるようです。

二〇〇一年五月十四日（第99号）

先週、「本とコンピュータ」主催の『電子出版の未来・実践騙』というシンポジウムが開かれ、久しぶりに新宿の紀伊国屋ホールに行ってきました。内容は参考になることが多かったのですが、謳い文句の“実践騙”という感じではありませんでした。

その理由は、ほとんどの参加者が大手出版社の編集者だということでしょう。彼ら自身は「電子」の世界に参加をしながらも、それは「好んで」ではないというような煮え切らない感じでした。ただ、意外だったのは、二十一世紀には自らが不要の存在になるかもしれないと、堂々と（？）さらに案外に明るく述べていたこと。

電子情報の一般化とインターネットで出版や編集という「機能」が大きく変わるといえるのは誰もが感じているところですが、「職業としての編集者は死滅する」「出版界はまちがいなく縮小する」という認識はいまや当事者でも疑われないようになってきているですね。

さて、そこでなにをするかというのが“実践騙”でしょうが、その辺は明確ではありませんでした。そのためには電子データの拡大に対する単なる危機意識や乗り換え論ではない本質的な論議が必要なのでしょうし、さらにこうした「出版文化論」を超えた「出版産業論」も興味があります。出版は文化ですが、産業でも

あり経済的側面は無視できないからです。

これは二時間や三時間の会合では無理で、あとは九月から第二期がスタートするという雑誌を見てくれというのが主催者の狙いではあるのでしょうか。

二〇〇一年五月二十一日（第100号）

特に感慨ありませんが、このメールマガジン「MyBook」が通算で一〇〇号ということになりました。これからも「MyPace」で進めていくことにします。

ファープルの『昆虫記』（岩波文庫版 全10巻）を読み終わりました。中断もあり、また時間を見つけての（多くは移動の電車内）読書ですから、おそらく三年近くの時間がかかっていると思います。

十九世紀末から二十世紀初頭まで三十年間にわたって書き続けられたこの膨大な著作について（特に日本では）大概の人が知っているようですが、全巻を読むひとはどのくらいになるのでしょうか。おそらく教科書か何かで断片を読み、単なる虫の観察記録程度に考えているひとが多いと思います。しかし、『昆虫記』は「博物学の巨人ファープル」（これは奥本大三郎氏の言葉）の知識と経験の集大成であり、随所に人生と人間に対する深い洞察と美しい思い出が散りばめられた、その名に値する数少ない永遠の書物であると私は思います。

ファープルの時代にはビデオも電卓もコピーもなく（そもそも電気がなかった）、さらに生涯貧窮にあったファープルには虫眼鏡で根気よく観察をつづけ、粗末な机の上でペンにインクをつけて紙の上に記録していく以外の方法はありませんでした。しかし、

その結果、そこに類たくいまれな「文学」が生まれたのです。映像でなく、言葉（文字）で記録したからこそ、単なる観察記を超えた広がりや深みが生まれたともいえます。

現代にはもちろん、こんな学者もいないし、こんな方法論も存在しないでしょう。幸福なのか不幸なのか、誰にもわかりません。この『昆虫記』についての私なりの想いを書いてみたいというのが目下の希望です。



## 二〇〇一年六月四日（第101号）

（メインに使っていたパソコンが突然故障しました。これが確か五月二十四日（金）でした）

先週は当方のパソコントラブルでいろいろな予定が狂ってしまいました。時間がなくて、メーカー（SONY）のユーザーサポートに連絡したのは五月二十八日（月）になってしまいましたが、その後のSONYの対応は満足できるものでした。

朝一番の電話で対応に出た担当者に状況を説明、多分、画像関係のボードの故障ではないかということで「受付番号」が発行されました。本体のみを次の日の午前中に専門の宅配便業者（日通）が引き取りにきました。水曜日に担当者から電話があり、購入時期が間違って記入されているとこのことで修正をもらい、保障期間であったことがわかりました。金曜日の午前中に修理を終わったPC本体が到着、予想どおりVGAカードの交換だけでハードディスク（つまりデータ）は無事で戻ってきました。

保障期間内だったので費用は運送費も含めて無料でした。思えば最初から画像がちらついていたりという現象があったので、そんな不安定な製品を出荷したことには不信がのこりましたが、ユーザーサポート自体は大変気持ちのいい対応でした。どんな仕事でもミスをした時の対応でその会社の力がでることがあります。

齊藤治さんの「自費出版と流通」の連載が終わりました。ありがとうございます。ありがとうございます。「流通」に限らず自費出版はインターネット社会の中で古くて新しい自己表現として大きな変貌をとげていくと思います。今後もご意見をいただければ幸いです。

二〇〇一年六月十一日（第102号）

第四回日本自費出版文化賞の最終審査は六月一日に行われ、大賞はじめ各賞が決まりました。四月に決まっていた「入選作」とともに七月の表彰式前に連絡で忙しくなりそうです。また、入賞した方々からはお礼の声が寄せられています。

しかし、選考であるからには、光と影があり、入選を逃した人の中には「どうして？」と思っている向きもあると思います。先週、自費出版文化賞に対して以下のような意見が電子メールで寄せられました。

一次審査をvolunteer（素人）にやらせるとは、前もって知らされていないかった。裏切りであり、暴挙である。自費出版文化賞は、とんでもなくunfairな賞と思わざるを得ない。機会があれば天下に向かってそのように発言して行くつもりである。

書名とメールアドレスもあるので、このひとは反論を望んでいるのかもしれませんが、この件について幹事の方に意見を伺いました。

\*

この発言に対し、私の意見は「無視」です。応募者でしたら作品を知りたいですね。

どんな人なのでしょう。いずれにしても賞の選考の方法を知らない人でしょう。私も、気にしなくてもいいと思います。どこに告発しても問題にはされなれないと思います。自費出版の著者にはさまざまな人がいることが、難しくもあり、また興味のあることでもあります。

自費出版と自費出版文化賞の認識不足、勘違い。自費出版に対する文化の捉え方の違いでしょうか。いろいろな意見があるっていいじゃないですか。無視、問題なし。私も同感です。余談ですが「天下に向かって発言して行く」話題になれば、いい宣伝になります

無視した方がよいと思います。どんな発言をするのか見極めてから対応した方が良い対処方法が生れると思います。お相手をしてもらって、何かと掻き回したいタイプの人かと考えます。

\*

実は、私はちよつとくやしかったので反論をしようと思つていたのですが、皆さんのおとなの意見にしがって「無視」することにしました。とはいえ、ボランティアが専門的な知識もない鳥合の衆のような言い方ははっきり間違つているといつていいと思います。

逆にいうと「プロ」にまかせておいた政治や行政で日本がどうなっているかを考えれば、化石のような自意識を持った専門家でないという意味では「素人である」と開き直つてもいいと思います。妙な符号ですが、今回の自費出版文化賞の「研究評論部門」

になったのは中田豊一氏の『ボランティア未来論』です。「参加型社会」という新しい文化と生活の創造を目指す動きが高まっている中で、自分自身の行動についても考えさせられました。

二〇〇一年六月十八日（第103号）

先週の後書では自費出版文化賞あてに届いた抗議メールについてちょっと興奮してしまいましたが、思えば、この賞のようになり穏当と思えるものでも、これまで応募者から「詐欺団体」呼ばわりされたり、電話で猛烈なお叱りを受けたりということが何回もあります。

最近よく聞く話にボランティアに参加する人は「飽きっぽい」のだというのがあります。目的意識がある間は猛烈にやるが、それがなくなるとたちまちいなくなってしまう。いっぽうで、世の中のインターネットブームに乗って作られた個人のホームページの多くが無残な姿をさらし、運営を続けていても反響のなさに意気消沈している人が多いといえます。

何であれ、人間の活動意欲を高めるのは他人とのコミュニケーション以外にないと思います。世の中と完全に関係を持たないひとがいたとして、興味を共有する友人も家族もないとなれば何をやっても面白いことがないでしょう。まして自分のことをわかってくれる人は周囲にもそうそういないのが普通ですから、多くの人が自発的にコミュニケーションや行動を始めているのです。原点に帰る以外にありません。

自費出版文化賞でも、電話で受賞をお伝えするとほとんどのひとが「夢のようです」と喜んでくれます。私達の活動がそうだと

いうわけではありませんが、行動を続けていればかならず評価してくれる世の中であると思いたいものです。

## 二〇〇一年六月二十五日（第104号）

私が普段使うソフトとしては、業務用（開発用）のデータベースソフトなどを別にするとやはりワープロソフトが多い。最近はメールソフトを使うことが増えたのでひところほどではないですが、文書を作るといえばワープロソフトを使うのが普通です。

最近いくつか手がけたオンデマンド出版でも、著者はほとんど「MS-Word」か「一太郎」を使っていました。「一太郎」はかなり古いバージョンも混じっています。私はマクロを使う関係で「MS-Word」派ですが、このソフトをDTPソフトとしても使っていますので、その動向には関心があります。ちなみに、かつての「松」対「一太郎」戦争のなかで「松」を使っていた人はWindowsになっても「一太郎」を使うのをいさぎよしとせず「MS-Word」派への転向族が多いようです。

この「MS-Word」がOFFICE-XPなる名称の元に二年ぶりにバージョンアップしました（正式バージョン名はWord2002）。二年間何してたんだろうと思うほど見かけは変わっていませんが、いくつかの変更があります。

個人的に一番利用しやすいのは「描画オブジェクト」と呼ばれる作業エリアを作成できること。文字通り、図形や画像を編集する画面で、通常の文字編集エリアとは別個の取り扱いができます。従来でもグループ化すれば図形としてまとめる扱いは可能でし



たが、それでは個々の図形は扱えないし、文字と一緒に動いたり、文字と図形の選択の順番とか苦労がありました。グラフィックソフトのレイヤなみとまではいきませんが、従来よりは扱いやすくなりました。また画像（図形、写真）がやっと回転できるようになりました。その他では「ルビと被ルビ文字間隔の指定」や「文書の書式設定を行う方法の追加」、「グループ文書用のツールバーの改善」など細かいことが多いです。

なんとなく使いやすくなっているのですが（総じてインターネットなどで共有することにポイントをおいてきていることがわかります）、基本的に文書構造が五年前のソフトと一緒ですから、あまり新しい機能もつけられないでしょうし、やることが無くなってきたのがわかります。経済の成長神話は崩壊しましたが、ソフトウェアのバージョンアップ神話はいつ崩壊するのでしょうか。

本誌「一〇二号」に書いた「ボランティア審査員」に対する非難の投稿に対して、岡田久男氏から長いお便りをいただきました。岡田さんは第一回から自費出版文化賞の審査にご協力いただき、第二次審査にも欠かさず出席いただいているかたです。

内容はいろいろな問題を含んでいますが、岡田氏もいうように『投書者も「ボランティア」（無報酬）が悪いと言っているのではなく、一次選考員の質を問うている』のは事実と思います。ただ、この投稿者には「ボランティア≡無報酬」というより、「ボランティア≡非専門家」というニュアンスがあり、これに関して、私にも岡田さんにも反論があるということですが。

実はこの点に関しては喜田えり子さん（ひかり工房）からも直後に次のような連絡をいただいていました。ひかり工房は今回の自費出版文化賞の研究評論部門賞を受けた「ボランティア未来論」の作成にあたった会社です。

『プロとアマの話同感です。又自費出版の出版界での位置についても同感です。中田さんの本が今回研究評論部門で表彰されました。中田さんはこれまでもプロの出版社で本を出された経験のあるセミプロです。彼が敢えて出版社でなく、当社に印刷を依頼して下さったのは話題となっているテーマの一つの答えではないでしょうか。半年間中田さんと、編集や校正、修正をやり取り

しながら本当に編集者としても楽しい経験をさせて頂きました。装丁を中田さんの知人のデザイナーに頼んだりコンズさんに版元になってもらったり私や社員で書店回りをしたり、本を創ること、本を売ること、本を読んで貰うこと。そして本を通して交流の輪を広げること、自費出版の醍醐味を私は充分堪能しました。中田さんも同様と思います」

喜田さんは最近の出版事情の中で「自費出版で本を作る世界のとんと芳醇なことと思わざるを得ません」とも述べています。つまり、出版のプロ（従来の出版社）から、よりアマチュア性の強い自費出版という形態のなかで生まれるなにかがあるということなのです。このあたり岡田さんの指摘とどうつながっていくのか整理がついていませんが、（個人的なことも含めて）今後の活動のなかで重要な意味をもっているような気がしています。

岡田さんが指摘していることで

- (1) 入賞作品の内容・評価をもっと詳しく情報提供する。
- (2) 一次審査から最終選考までのプロセスの中に「選考基準」に基づき云々のメッセージを入れる。
- (3) (結論) 次年度から「ボランティア審査員」という呼び方を一切止める。  
などについては基本的に賛成です。

なお、この件に関して自費出版ネットワークとしての情報が無いのはなぜかということ述べていますが、自費出版ネットワーク

クはそれほどちゃんとした組織ではないということ（！）を示しているのかもしれませんが。こうした意見は本来このメールマガジンですることではないと思いますが、現在では、そうしたことも含めて論議ができる場がないということなのです。

今週の「MyBook」は通常記事の発行をお休みします。なんだか隔週発行みたいになっていますが、週刊であることには変更ありません。今回は「自費出版文化賞」の表彰式に参加して感じたことをお伝えして発行に代えさせていただきます。

先週の七月十四日に恒例の「自費出版文化賞の表彰式」が行われました。場所はこれも例年どおりの東京ビッグサイト（東京国際展示場）です。表彰式終了後には恒例になっている受賞者出席のパーティもおこなわれました。

今回から、二次選考以上の方全員にこの表彰式の案内を出したこともあり、作品の展示会では例年以上に個人の方の参加が多かったようです。自分の作品を前に写真をとるなどなかなか姿も目につきました。また、表彰式終了後のパーティでは、大賞に選ばれた高田氏が「どうして私の作品が選ばれたのか理由を聞かせて欲しい」と審査委員につめよったり（？）、入賞者以外の方も参加してのスピーチに参加者が聞き入るなど自費出版というテーマならではのユニークで楽しい話でおおいに盛り上がりました。

「出版祝賀会」はありますが、自分の作った作品をこういう客観的な場で紹介したり評価してもらったりという機会は（少なくとも自費出版の場合、あまりないと思います。自費出版文化賞の表彰式は昨年あたりから参加者による“交流会”的な色彩を示し

ています。

今後は単なる作品の展示や表彰式、パーティということではなく、自費出版というテーマで結びついた人たちの「交流会」のような形式にしたらどうかと思います。いかがでしょうか。

なお、おなじく七月十四日、午後二時から自費出版ネットワークの二〇〇一年度総会がひらかれ、新しい事業計画などが決まりました。「二〇〇万人の二十世紀」企画などの詳細は、おって掲載予定です。

なお、会場やパーティなどで「MyBook」の読者ですという何名かの方からごあいさつをいただきました。毎回ヒヤヒヤもので発行しているわけですが、読者の方に励まされて責任とやりがいを感じる次第です。

二〇〇一年七月二十三日（第107号）

相変わらずドタバタした日を過ごしています。やる気のある時と無い時の差が激しくなってきたような自覚がありますが、昔からそうだったような気もします。わかっているのは私の場合はいわゆる精神病理学でいうところの躁鬱症ではないことで、その証拠にちよつとしたきっかけで簡単に症状が改善します。

周囲から見るとたいしたことではないようなことに悩んでいたり、自分のしていることがなんとなく無意味に感じられるということは誰にもあると思います。問題はその悩みの中身が明確でないことで、はつきりしない不安、誰にもわかってもらえない悩みほど始末に悪いものはないのです。人間の心は微妙です。そんな時の立ち直りのきっかけは他人とのコミュニケーション以外になりようです（直接、間接に）。

特にやさしい言葉でなくてもいいのですね。「お元気ですか？」のひとことをかけるようにしましょう。自分も豊かな気持ちになれます。電子メールはこんな時にも便利です。

前号に書いたホームページ拝見の「吉川知生さんのページ」について名古屋の小園さんから「似たようなことをやっているひにいるんですね」という感想と自分のホームページとメールマガジンの紹介をいただきました（今回の掲載）。小園さんはワープロソフトで編集をやっているそうで、今度は私が「似たようなことをやっているひがいるんだ」と感じる番でした。こうやって同じような興味をもつひと同士が知り合えるというのはとても面白いことです。

『美の巨人たち』というテレビ番組を毎週楽しんで見えています（土曜夜十時・テレビ東京Ⅱ東京地区）。毎回、絵画や彫刻などの美術作品一点を中心に、その作者や作品の生まれた背景などをていねいに説明していくものですが、ひと昔前の芸術映画とは違った角度からの制作方法が特色になっています。作品について説明してくれるのはナレーターではなく、画家の弟子だったり、取引先だったり、時には絵画の中から抜け出した登場人物のこともあります。

私たちは一枚の絵を鑑賞するとき、それを描いた画家の思いや生活のありさまなどを考えることはまずありません。この番組は、古今の名作が生まれたその裏側に、計り知れないようなドラマがあることを教えてくれます。これは美術作品に限りません。



番組の最後に、登場した作品についてかなり思い入れをこめた形容を行います。もちろん毎回違うのですが、山下清の『長岡の花火』の時の「奇跡の一点」という言葉が印象に残っています。

二〇〇一年八月六日（第109号）

暑中お見舞い申し上げます

関東地方は昨日今日と涼しいですが、全国的にはとても暑い夏が続いています。暑いからだけではなく、冷房の効いた場所とそうでない場所の移動で体がまいってしまふことが多いようです。皆さんご自愛のうえ、心身ともに健康で充実した生活をお過ごしください。

なお、発行者の都合により今週の「MyBook」をお休みします。来週は季節の上では「秋」になってしまいます。黒坂さん、季節をずらしてしまつて申し訳ありません。

二〇〇一年八月十三日（第110号）

「新潮文庫の一〇〇冊」というキャンペーンに乗ってうかうかと買ってしまった本が『エンデュアランス号漂流（原題：ENDURANCE）』。ノンフィクションは大好きですから選択に間違いはなかった、というよりこれは驚くほどの傑作でした。

第一次世界大戦のころ、南極大陸横断に挑戦した探検隊が沈没した船を捨て、揺れ動く流氷と荒れる海を乗り越えて十七か月後に全員無事で生還を果たす——これはまさに典型的な遭難事故ですが、体験は記録されることによってはじめて歴史になり、後世に残ります。

その漂流記録を作家のランシングが調査しまとめたのが一九五九年。「これから述べる話はすべて真実である」という冒頭の一行でリアルティを保障された想像を絶するストーリーが、詳細、緻密に絶妙の構成で一気呵成に展開します。これほどの内容の本の日本語訳が出たのがなんとその五十年後の一九九八年です。文庫版の解説のなかで、アラスカで亡くなった動物写真家星野道夫氏が座右の書としていたというエピソードも紹介されています。実際の冒険家を感動させるというのにはちよつと信じがたいですが、この本の迫力はそれほどすごいものがあることを示している実話だと思えます。

南極探検での極限を描いた記録としてすぐ思い浮かぶのはチエ

リーガロードの『世界最悪の旅』です（私は筑摩書房から一九七二年に出た「世界ノンフィクション全集」版の抄訳を持っていません）。しかし、その内容は比較になりません。『世界最悪の旅』は実際の参加者の体験記なので、作家の手になる『エンデュアランス』と比べてはいけないうちかもしれませんが、それ以上に、同じように死と隣り合わせの極限の苦闘を描いてはいても生存のための条件が違いすぎるように思えます。

この歳になると、勇気づけられる体験に出会うことはめったにありませんが、この本を読んでいる時間は、まさしくそれに値するものでした。この記録がノンフィクションの古典となるのは間違いないでしょう。

二〇〇一年八月二十日（第111号）

私は自称「環境派」で、科学技術の過剰な発展が人間にマイナスの要素をもたらすことは十分認識しているはずなのですが、なぜか技術やその歴史には興味があり、特に日本の飛行機（戦前の兵器としての開発経緯）やロケット開発には、まあ通常以上の関心があります。

そして、靖国問題がうやむやに終わったのもつかのま、いよいよ来週の土曜（二十五日）には、二十一世紀の日の丸が宇宙に飛び出します。日本のロケット開発の運命の日で、宇宙開発事業団（NASA）の、HⅡAロケット試験機一号機の打上げが行われるのです。正式な発表としては

打上げ日 平成一三年八月二十五日（土）

予備期間 平成一三年八月二十六日（日）～九月三〇日（日）

打上げ時刻 一三：〇〇～一八：〇〇

打上げ場所 種子島宇宙センター 大型ロケット発射場 です。

この打ち上げの準備やHⅡAロケットの詳細については、宇宙開発事業団のホームページで見ることができます。種子島宇宙センターにある「大型ロケット発射場」の様子をリアルタイムで見せていますが、最新の画像を見ると台風の影響で高い波が打ち寄せているのがよくわかります。

HⅡAロケット8号機の打ち上げ失敗から二年。世間の評価や構造改革での「事業団」の位置づけなど日本の宇宙開発は順調にいくようにとは思えませんし、開発体制が三つあるなど、かなりの

無駄があることは確かですが、開発にあたっては技術者は自分たちの誇りにかけて成功させたいと意気込んでいるでしょう。こういう情熱はつまらない政治家や官僚の名誉慾とは何の関係もないことです。

お盆休みも返上しての整備点検、と思いきや、十三、十四日はお休みだったようでホームページも更新されませんでした。どんなに準備をしても万全とはいかないのはどの仕事も同じですが、ロケット打ち上げの場合は成功と失敗が劇的に（ある意味でわかりやすく）展開します。ここが厳しいところです。

## 二〇〇一年八月二十七日（第112号）

HⅡAロケット試験機一号機の打上げは延期（やはりお盆休みなどしている場合ではなかったのか？）。予定日は八月二十九日（水）だそうです。

お盆といえば一昔前まではお化け映画が幅をきかせていたのですが、最近はコンピュータネットワークの中を妖怪が飛び回るようになったようです。私がメンテナンスしているある会社のWebサーバが二週間ほど前から理由もなく停まるようになりました。パソコンが停まるのではなく、Webサーバ機能が停止、つまり利用者からみるとそのサイトにつながらない状態になるわけです。原因がわからずとりあえず再起動してごまかしていたのですが、最悪の場合は再起動して三十分もたたずに停止してしまうようになりました。

お盆休み後に関係者に問い合わせしてみると「MS社のWebサーバを狙ったウイルスが猛威をふるっているようで、それではありませんか」との返事。さらに利用しているプロバイダからも注意を呼びかけるメールが届きました。さっそくMS社の対応サイトをのぞいてみると八月十六日付けで対応策が掲載されているではありませんか。

正確に言うと、ウイルスではなく「Code Red II」という「ワーム」だそうで、八月四日以降国内外のホストで感染を広げている

ようです。その後聞いた話では大手S社のサーバの十数台が感染したとか、これも大手R社では、可能性のあるサーバを社内ネットワークから切り離すよう命令を出したとか、大騒ぎのようです。これも噂ですが、国内で数千のサーバが被害を受けたのではないかという説もあります。

新聞等でよく取り上げられるような、Eメールで配達されるウイルスとは違い、一般の利用者に迷惑が及ぶものではないので社会的な影響は少ないかも知れませんが、誰でもサーバをたてて情報を発信できるような時代になっただけに、このようなことをする人間が世の中にいるということをしつかりと認識しなければいけないことを感じます。

またメーカー（特にMS社）には、簡単に設定できて、しかもセキュリティに優れたWEBサービス機能を開発してもらいたい。修正プログラムをインストールすることで、今回、私のところのサーバは立ち直りましたが、さらに新車の攻撃が仕掛けられる可能性は常にあります。サイバースペースでの熱い戦いはまだまだ続いているのです。



二〇〇一年九月三日（第113号）

前回の「コンピューターウイルス」について読者の方から次のような意見（指摘）をいただきました。

「確かにCode Redに感染するということは『被害』ですが、同時に他のサーバを巻き込んでいる「加害者」でもあるのです。Web上にサーバを公開している以上、そのサーバが与えた被害について、責任を持つ必要があると思います。そのへんの自覚をもつとってください」

事情はあるにせよ、うかつだったことは否定できません。これまで以上にセキュリティに心がけるようにします。

いつもの散歩コースのひとつの川沿いの道を歩いていると、季節にもよりますが、今頃だと休日の午後四時から五時くらいまではかなりの人と行き交います。そのうちの七割近くが犬を連れた散歩を楽しんでいます。土手の上の狭い道ですから犬を避けるわけにはいかず、しかも中には飼い主を引っ張っているようなキングサイズの犬もいますから犬嫌いのひとは落ち着いて散歩をすることもできないでしょう。

見ていると犬連れの人どうしは大概、あいさつしたり、それとなくお互いの犬をほめあったりと結構コミュニケーションがあるようです。この辺がペットを飼っている効用でしょうか。

私が子供のころには、飼犬を鎖でつないでおく義務はなかったように、遊びに出かけると犬が勝手についてきて前後を駆け回り、まったく自由な散歩が可能でした。ただ、その分だけ野良犬は多く、保健所（？）による「野犬狩り」が頻繁に行われていて、子供たちはこれを「犬殺し」と呼んで怖がっていました。犬には野性味が必要と思う私は最近のあたかも子供の代用のようになったペット犬はあまり好きではありません。

二〇〇一年九月十日（第114号）

今回の「ホームページ拝見」は、福井市のタカハシさんに自分で開設している自分史（個人史）のホームページについて書いていただきました。今後もこのように興味深いホームページを発見していきたいと思います。

七十歳代後半の元企業診断士の方の本を造っています。昭和五十年代から書きためた随想や論文などを八十歳を前にまとめておきたいということなのですが、見せていただいた原稿はすべてパソコン（ソフトはちよつと前の「一太郎」）で作成、レイアウトや目次まで作成してある労作。もちろん専門家ではないのでインデントがすべてスペースで代用してあるという組版屋泣かせのデータですが、私のアドバイスにしたがって組み直したり、記事の発表年月を調べて挿入するなど精力的で、「今でも現役でやれますね」というと「そりゃ無理ですよ」と笑っていました。

私の父母と同年代ですから、まさに“おじいちゃん世代”なのですが、自分で仕事をやってきたひとというのはこんなに元気なんだとあらためて驚きます。自費出版は熟年世代（シニア世代）の趣味ということはよくいわれますが、実際このように自分の本を出すひとは、少なくとも定年（六十歳頃）を過ぎて、さらにひと仕事を終えて、それでもまだエネルギーにあふれているようです。

高齢化がいわれ、不況のなかで中高年のリストラ、再就職が話題になっていきます。しかし、この場合の中高年はただかだか四十歳、五十歳です。人間は健康であればそれから二十〜三十年も情熱をもって生きていける——そういう時代にわれわれはいます。とはいえ、単純にこれがいいことだとは思えません。

二〇〇一年九月十七日（第115号）

八月一日に翻訳の出た『単独密偵』（新潮文庫 ロバート・ラドラム著）という小説のことをこの編集後記に書こうと思っていました。いわゆる「スパイ小説」で私はほとんど読まないジャンルですが、めぐりあわせで買うことになり、読んでみるとそれなりに面白い。しかし印象に残ったのが、国際テロ組織による無差別攻撃とその背後にあるいくつもの秘密情報組織、そして情報謀略戦争でした。

車のナンバープレートも読めるという高性能人工衛星を使つての映像傍受やホワイトハウス内部にまで仕掛けられた電話盗聴システム。国際テロには犯行声明がなく、こうしたテロを未然に防ぐための国際情報組織をつくりその情報を独占しようとするのが経済と政治の頂点に立つ独裁政権とコングロマリットという設定はやや無理がありますが、部分的にはリアリティがある小説でした。

しかし、テロは小説の話ではなく、偵察衛星や電話盗聴も国際テロ組織も、そしてその裏に暗躍していると思われる死の商人もこの世界にいます。私たちはその証拠をライブで見せられてしまいました。ニューヨークでの同時多発テロ、なかでも世界貿易センタービル崩壊の瞬間はおそらく二十一世紀の歴史に残る映像ということになるでしょう。

フィクションとして存在していたことが現実におければ、作家の想像力を遥かに超える悲惨さが生まれます。小説や映画の世界ではその悲惨さを無視してもいいわけですが、実際にこのテロを計画した人間はその惨劇さも「計算」していたのでしょうか。彼らは、まるでフィクションのストーリーリーを書くようにテロの計画を立てるだけなのだと思います。司令官が戦場で戦う一兵卒の犠牲を考慮していたらどんな作戦もなりたちませんが、その後の「悲惨さ」までを計算はしていません。その意味でテロの論理は戦争の論理を超えています。

二〇〇一年九月二十四日（第116号）

またまた使用していたパソコンが故障して「MyBook」の発行作業に支障が出てしまいました。申し訳ありません。かなり古いノートPCで、通信用だけに使い、大事なデータはバックアップしているはずだったのですが、なんと「MyBook」購読者用DBファイルだけがこのPCにあり、今年の二月からバックアップしていませんでした。また、メールのアドレスデータでも一部の最新データが失われました。使っていたパソコンが突然起動しなくなつて被害がまつたくないということはありませんね。

実は、先週から、これも私が管理者になっているメールリングリストの参加者で最近流行のウイルス「W32/Nimda」に関連して登録削除の申し出がいくつかあり、それに関連して、いろいろと調べてお知らせを出したりしました。そのため、今回の事故がこのウイルスと関係があると思うかもしれませんが、まつたくのハードウェアの問題です。

なお、メールリングリストやメールマガジンから送られる電子メールも通常の電子メールと基本的に同じです。また、通常、おかしなメールはこうした自分で直接選んだ相手から送られてくるものではありません。

今回のウイルスはアメリカのテロ事件と同時期に出現したという事で一部にはサイバーテロの疑いもかけられているそうです。

そういう観点からあらためて見ると、これらのウイルスがマイクロソフトの提供するブラウザやメールソフトを対象にしていることが妙にリアリティをもってきています。

実際に今回のテロの目標のなかにアメリカ文化の象徴のひとつであるコカコーラ社があったとの情報もあります。経済と文化の“アメリカンスタンダード破壊”がその狙いだとすれば、その標的のなかにインターネットとマイクロソフトが入っていても不思議ではありません。そうでなくても最近のコンピュータウイルスの出現にはちよつと異常なものを感じます。

インターネットは軍事用に開発されたシステムということもあり、物理的な攻撃にはかなり強いようですが、ネットワークを通じて全世界にデリバリーされる悪意を持ったプログラムを完全に防ぐ方法はありません。ここ数か月間にわたってしつこく狙われているマイクロソフトのホームページをみると同社の危機意識がかなり高いことがわかります。ウイルスの作者が誰であれ、大きな視点で見れば、これも新しい文化が生まれるときの軋きみのひとつなのだと思います。



二〇〇一年十月一日（第117号）

昨日の午前中に用事があつて都心に出かけたのですが、うっかり携帯電話を持つのを忘れていました。約束の会社の前までいったものの中にいる相手と連絡ができず、日曜のことで代表電話にかけても誰もでない。おまけにもうひとつの用事がこれも携帯電話にはいることになっていて、これにも出られないという窮地に追い込まれ、むなしく引き返すことになりました。

私の場合（あるいは現在ではかなりのひとがそうかもしれないませんが）電話番号は携帯電話かPDAのメモリに入っているので、機器が手元にないとどうしようありません。先週はパソコンが壊れて情けない思いをしましたが、今週は今の生活すべてが情報機器の有無に大きく左右されているということを思い知らされてしまいました。

つい先日、山田風太郎の『新八犬伝』を読んだのですが、この物語では情報通信の方法がほとんどない江戸時代ならではの事件が随所で起こります。例えば八犬士のひとり犬塚信乃が名刀「村雨」を関東公方の城まで献上に行くのですが、実はこの刀は巧みにすりかえられた二セもので、それを知った友人が切齒扼腕するものの知らせるすべはない、そしてそこから次の波乱万丈の展開が起こるといふような一節があります。その他にも八犬士がなかなか一同に会することができないのも基本的には連絡手段がないことにつきまします。まあこの場合や、すれ違いで有名な『君の名

は』などの場合は、物語の展開上の手段かもしれませんが、現実自体もそれに近い状態でなければ小説のリアリティはなくなりません。

しかし、現在でも電話やインターネット（これも電話網）がなければ、地理的に離れたひととひとが出会う機会は江戸時代とそうは変わらないのではないのでしょうか。こんなささいな個人的な経験からも、現代文明が意外にもろく崩れさることを私は確信しています。

二〇〇一年十月八日（第118号）

星野氏の連載とは無関係ですが、本や雑誌があまり売れなくなった原因は「携帯電話の普及である」という説があります。さらに、その根拠としては電車内での「暇つぶし」のかなりの部分が携帯電話でのメール操作（受信・発信）に奪われたためというのが有力だそうです。

確かにここ一、二年、電車内で携帯電話を手になにやら指先で操作している乗客（それも大概は若い女性）を頻繁に見かけます。そこで、実際にどのくらいの数がいるのか、私が日常的に利用しているJRのM線と地下鉄Y線で四、五日間調査してみました。といってもおおげさなものではなく、数車両を移動しただけですが。

時間帯としてはラッシュではなく（どうせ朝の通勤時はメール操作は無理でしょう）、午前中の遅い時間と夕方早い時間です。この時間はさほど混在せず、しかもビジネスマンがほとんどいないのですが、調べてみると、一車両に多い場合には七人以上、少ないときにでも二、三人の「携帯メール族」がいます。ひとりもいないということはまずありませんでした。地下鉄内でもかなりいります。さらに、メール操作をしていない場合でも携帯電話をお守りのように手に持っている乗客は他にも数人程度いることが多い。

もちろん社内での「暇つぶし」としては雑誌や本を読んだり、

居眠りをしている乗客の方が多いのですが、携帯メール族が決して無視できない割合であることは確かなようで、特に高校生になると二人に一人ぐらいの比率になっているかもしれません。

ここから何か意義ある結論を出すわけにもいきませんが、文化財とか何とかいっても本や雑誌の多くが「暇つぶし」の手段として購入されていることは確かでしょう。ますます簡単に「通信メディア」が持ち歩けるようになってくる時代に、印刷媒体が「暇つぶし」の主役の座を取り戻すのはかなり難しいようです。

二〇〇一年十月十六日（第119号）

日本での狂牛病やアメリカの生物兵器テロ騒動など、にわかに未知の病原菌が注目されています。やはり生身の人間にとつてもっとも関心があるのは自分の肉体のことです。健康なときには気にもしません、特に怪我や病気で肉体が侵されたり、具合が悪くなつて寝込んだりすると一瞬にして世界がまったく変わつてしまふことは経験した人にはわかるはずです。

まず、自分の身体以外のほとんどすべてのことに関心がなくなります。というよりそういう余裕がなくなるということ、おまけに病院や自宅の狭い世界に閉じこめられることにより社会的な視野が狭くなります。二、三日でもそうなることがあるようです。外の世界でおきているさまざまなきや事件、ビジネスといった普段当たり前を考えていることが、妙に遠い、違う世界のでき事のように思えるようになります。

これが数か月続けば（私には経験がありませんが）、おそらく人生観も変わってくるのではないのでしょうか。一年間以上の闘病生活をとおったひとを幾人か知っていますが、なにがしかの虚無的な雰囲気を感じるがあります。

どういふわけか知り合いの数人が入院したり腰をいためたりということがこのところ続いています。睡眠をとり、太陽を浴び、適度に歩くということをや心がけてください。もちろん、コンピュータ

ー  
タ  
ウ  
イ  
ル  
ス  
に  
も  
ご  
注  
意  
く  
だ  
さ  
い  
。

二〇〇一年十月二十三日（第120号）

発行者の都合により今週の「MyBook」をお休みします。コンピュータウィルのことを警告しておいて自分（の管理するシステム）が感染し、ひとの健康を心配しておいて自分が風邪にかかってしまうという情けない状況です。お酒も吞んでいないのに目が回るといふ体験を久しぶりにしました。原稿をお送りいただいた皆さん、まことに申し訳ありません。

二〇〇一年十月二十九日（第121号）

本誌にもたびたび登場する「文芸社」については、他の出版社で発行した本の著者に「書店配本可能な当社で再版しませんか？」という強引なセールスが有名ですが、逆の事例をひとつ。

一年ほど前にこの会社から小説を出版したAさん。結構な費用を払ったと思うのですが、できあがった本には単純なミスによる誤りがかなりありました。

このままこの本が残ってしまうのでは耐えられないと考えたAさんは、細かい内容も修正したうえで、別の形態で出版を考え、現在校正を進めています。権利関係も文芸社と話をつけた上でのことだそうで、本人は「とんでもないことをしているのでしょいか」といつていましたが、特に法的な問題はなさそうです。

それよりも、出版社としての文芸社にとってはかなり恥ずかしいことだと思いますが、そんなことを感じる会社ではないでしょう。



二〇〇一年十一月十九日（第122号）

三週間ほど発行を休みました。このうち一週間は発行者の体調のためです。十月十六日にこの編集後記に「病氣」のことを書いてから二週間後のこと。生まれてはじめて胃力メラをのみ、MRIをうけ、点滴を経験しました。高齢者を中心にした病院の混雑ぶり、高度な医療機器とそれと対照的な事務処理のアナログ処理ぶり、検査漬け・入院強要の医師と、対等に話し合えない患者の立場——などさまざまなことを考えさせられました。

体調不良のときは「無理しないで」という医者忠告を守っています。自覚症状がなくなればいつの間にか元の生活に逆戻りです。考えるまでもなく「無理しないで」よいのならはじめてからしていないわけです。少しは経験になりましたけれども。

別に編集方針を変えたわけではありませんが、「MyBook」発刊の趣旨にかえて、面白い自費出版の世界をお伝えするメディアでありたいと思います。雑誌の内容は記事次第、ご協力をお願いします。

二〇〇一年十一月二十六日（第123号）

今日の朝刊に出版社「アスキー」の経営危機が報じられていました。一度倒産した会社ですから驚きませんが、「アスキー」に限らず最近のパソコン雑誌はあまり売れていないようです。その原因がIT不況にだけあるとは思えません。

書店をのぞけば相変わらずにぎやかにパソコン雑誌がならんでいます。私には最近ほとんどこの種の雑誌を買いません。それでも月刊『ASCII』は定期的に購読してはいたのですが、最近の編集内容変更で読むところがなくなってきたという感じをもっています。

専門雑誌と大衆雑誌の間にあるようなこの種のパソコン雑誌を私が一番よく読み、活用もしていたのは一九八〇年代後半から一九九〇年代前半までのことです。当時はパソコンといえばハードはPC-9801、OSはMS-DOSという構成が定番で各誌の記事もこれにあわせた内容でした。

さらにハードはもちろん、ソフトウェアについても（OSを除けば）そのほとんどが国産で、今も活躍している優秀なソフトから、いつの間にか消えてしまった幽霊企業のあやしいソフトまで、まさに百花繚乱、毎号の紹介記事が楽しみでした。また、この時代は初心者といってもそれなりの覚悟をもって勉強に取り組んでいましたから、読者にも一種の連帯感があったような気がします。

その後、気がつくと、ビジネスソフトはマイクロソフト社一色となり、他の分野で使われるソフトまでどこに行っても同じという状況になってしまいました。おまけに読者対象は初心者ですから、いづどれを見ても似たような記事しか載らないという傾向になり、つまり実用になるならない以前に興味がわかないわけです。

そうはいっても、当時と比べておそらく数倍以上複雑になってしまった開発の現状では、ほんのひと握りの大企業にしか新しいアプリケーションソフトの作成はできません。雑誌ばかりでなくパソコン業界全体にあったあの頃の熱気と情熱を懐かしく思い出すことがあります。

静岡市で経営コンサルタントをしていた友田さんが、なんのコネも持たず、知人もいない南米に旅立ったのは三年前、六十歳のときでした。以来、現在まで、中南米各地で四か月暮らし、二か月間日本で暮らすという生活を続けています。

恵まれた資産家の話のようですが、実際には中南米では、アパートを借りて自炊すれば（語学を学びながらでも）日本円で月十万円程度で普通の暮らしには困らず、さらに生活物資は露天市場で安く買えますから多少の貯蓄と日本の年金で十分生活できるらしいです。航空運賃にしてもアメリカまで数万円の格安チケットがある現在、それほどのこともありません。

とはいえ、友田さんが、誰にでもできるわけではないそうした行動を始めたのはなぜなのでしょう。個人的な動機はさておき、大きな理由が友田さんの反骨精神。特に九〇年代に日本政府のつけた「低金利政策」と「地震対策」と「シートベルト着用法令」には「私は唾然とした。こんな馬鹿な政策を国民に押しつける政治家たちの身勝手さに驚くと共に、文句も云わずに黙って従う国民にも大きな違和感を抱いた」という。

みんながいつせいに同じ方向を向く国、汗を流して日本の復興を実現した高齢者を邪魔者扱いる国——こんな国にはいたくない。そう思って「野垂れ死に覚悟」のひとり旅にでた友田さん。

十月に帰国後、この三年間の生活を『きままに中南米ひとり暮らし―六〇歳からの出発』という本にまとめ、十二月十四日には今度はスペインに飛び立つそうです。

星野さんの連載にもあるように、中堅取次ぎの「鈴木書店」倒産のニュースが朝日新聞などマスコミで大きく取り上げられました。負債額などだけから見ればこんな大きな記事にならないでしょうが、この辺が「文化産業」としてのマスコミの扱いの違いでしょう。朝日新聞は以前に日販の赤字決算をおおきく報道したこともあり、つい一昨日の夕刊では銀座の老舗「イエナ洋書店」の廃業をかなり思い入れを込めて報道していました。

大きくいえば新聞も出版メディアの一員ですし、再販制度維持をはじめとする出版の体制が崩れることに危機感をもっているのかもしれない。

さて、本が売れないのはこんな記事を読まなくてもわかっていきます。すでに「書物」が情報伝達や娯楽の王者の地位をすべり落ちて久しいし、これは残念ながら元にもどせない状況だと思えます。しかし、こうした商業出版の衰退と自費出版を同列にみてはいけません。表現メディアとしての自費出版の可能性や広がりにはむしろこれからだ、私は強気に信じています。

二〇〇一年十二月二十四日（第126号）

私がまだ六く七歳くらい頃の冬の夕暮れ、自宅の前で見た空の美しさを今でもはつきり覚えています。沈みゆく夕陽に照らされて青から濃紺に移っていくこの空を見て、私はこうした光景が自分に感動を与えることを始めて知ったのかもしれない。その後数え切れない夕空を見たわけですが、残念ながら、その時を超える感動を味わったことがないような気がします。

そういえば、私の心に残っている色はどういうわけか青が多い。もっと小さいとき、生家の近所の水田の上を飛んでいた模型飛行機の羽根にはられたパラフィン紙の青もよく覚えています。いま思うと、何か、自分には手に入らない永遠の美の象徴だったような気がします。

一年の終わるのは早いもので感慨にふけっている間もありません。ここ数日、オンデマンド出版用に原稿を作る人のための「マニユアル」風のデータを作っていました。全国各地に自分の手で自分の本を作っている人がいるようです。情報テクノロジが人間の生き方を変えるひとつの事例になるのかもしれない。年明けにはこのテーマでの新連載を企画しています。

年が変わってもあいかわらずの日々です。今回から「自費出版の風景」という連載を開始しました。体系的な文章にはなりそうもないのと、私の出版社「本の風景社」から名前を借用しましたが、NKHテレビで『空海の風景』というのを観た影響もありそうです。

『空海の風景』も面白かったです。NKH教育テレビで観た『小澤征爾ニューイヤークンサート』も『飛鳥宮発掘ドキュメント』もなかなかよかったです（なんだか正月はテレビばかり観ていたようですが、夜だけです）。批判はありながらもNHKは中高年世代の嗜好をよく知っているように思います。



二〇〇二年一月十四日（第128号）

今回から「著書を語る」で紹介している『北近江農の歳時記』は、滋賀県のサンライズ印刷（出版）が発行している雑誌『Duet』に掲載されたものです。この情報誌は出版に限らず、地域の文化・経済などの情報を取材し、まとめて隔月に発行されています。取材も編集もすべて社内で行っていると聞いています。それくらいできなければ出版活動などできないとは思いますが、継続して続けていくには大変な努力がいるでしょう。自費出版のこともさりげなく出てきます。

また、兵庫県で自費出版を行っている交友プランニングセンターでは『ふぉーらむ』という雑誌を季刊で発行しています。この内容は自費出版に関するものだけのようですが、関心のあるひとがみるものであれば、こういう形もPRとしていいでしょう。

そのほかにも自社あるいは地域のPR・情報誌あるいは自社の自費出版情報を発行している会社は全国にかなりあると思います。インターネットの台頭で紙の雑誌の運命も云々され、雑誌『本の風景』も休刊になってしまいました。メディアとしての有効性が失われているとは決して思いません。

大阪の喜田さんがまた面白い原稿を送ってくれました（雪代敬子さんエッセー集ができるまで）。この連載の最後に出てくると思いますが、喜田さんは「自費出版の醍醐味の一つは人との出会いです」といつています。

実際、自費出版に限らず、出版や放送などのメディア製作の面白さは「人との出会い」にあるといつていいでしょう。もちろん、その人を通じて、あるジャンルの知識や情報を教えてもらえるというのも副次的な“役得”です。ただし、これを単なるビジネス（仕事）と考えれば、面倒なだけの人間関係と商品情報が増えていくだけのことです。

人との出会いが楽しみで、芸術から自然、建築、歴史、電子工学とあらゆることに興味を持てるものにとつてはこれほど楽しい仕事はないかもしれません。もちろん、苦勞と悩みの元もここにありますが。

二〇〇二年二月四日（第130号）

早くも「自費出版の風景」を休みます。

先週の土日に仙台で自費出版ネットワークの全国交流会があり、地元の皆様のおかげで大変有意義な研修会ができました。青森の方など十五年ぶりに会う人もいて懐かしかったです。皆さん、相変わらずの仕事熱心さで「人間は変わらない」ということを実感しました。「変わらない」といえば、この交流会で講演をお願いした宮城大学教授の久恒啓一先生によると、人間の人格の基本は十九歳、二十歳までにできているそうで、したがって、そこまでの人生を振り返らせることは、自分がこれから何をしたいかを考えるために非常に有益なのだそうです。

久恒教授はこれを「未来をひらく自分史」と名づけて、実際の授業や就職活動に利用しているとのこと、「自分史は人生を終わった人だけを書くものではありません」というのが持論です。また、自分史はそういうものだから、これをひろく集めて分析すれば人間の感情や欲求など大変なデータの宝庫になるのではないかと述べていました。これを実際にやるのは大変なことでしょうけれども応用範囲の広い面白いテーマです。

一月の終わりの「読売新聞」に『オンデマンドで自費出版』という見出しの記事が出ました。その前に、取材先の紹介依頼や電話での取材がありましたので大体の内容はわかっていたのですが、いざ出てみると、ちよつと違ふなという思いがあります。

確かに自費出版の裾野が広がったことは確かですが「オンデマンドで安価にできるようになったので団塊世代が本を出すようになった」というストーリーは、私の率直な考えとは違います。なにより十万円という価格が出てしまうことはちよつと問題です。

この新聞で紹介された本は特別の料金設定で、現在は十万円ではできませんし、作成された本自体も、編集の手を抜いた感じは否めないものでした。出版は「単なる印刷」ではありません。どんなに時間がなくても、そこに編集という作業が加わるべきで、著者も実はそれを望んでいるのです。その編集を主体にするためにこそオンデマンド出版はあるというのが私の考えです。

とはいえ、すべての人が納得するような記事を書くことは不可能です。自費出版ネットワークの名前が出るようになったことだけでもよしとしなければならぬのかも知れません。

二〇〇二年二月二十五日（第132号）

第五回日本自費出版文化賞は二年ぶりに約一〇〇〇点の応募となりました。二月中旬での応募状況ですと総数は九九二点です（ちなみに昨年は八七三点でした）。この時点での部門別の割合は

- ・域文化部門 一三五点
- ・個人史部門 二六二点
- ・文芸A部門 二七四点
- ・文芸B部門 一四三点
- ・研究・論文部門 一一一点
- ・グラフィック部門 六七点

です。相変わらず、文芸が多いです。現在、専門委員による第一次審査が行われていて、三月末までに第一次選考作品（二〇〇〜三〇〇点）が決定されます。第二次選考会は四月二十日（土）〜二十一日（日）に八王子の大学セミナーハウスで開催、入賞作品約六十点が選考されます。

昨日夜のテレビ「ほんパラ 痛快ゼミナール」で、サンライズ出版発行の『ふなずしの謎』が取り上げられるというので、仕事の合間に見ていましたが、なんだかあつという間に終わってしまつた感じです。前回の別の本の時にはほとんど反響がなかったそうですが、今回はどうでしょうか。とはいえ、テレビや大新聞が取り上げるのもつばら、自分たちの企画や記事の構成にしたがつてですから、こちらの思うように取り上げてもらうことは望めません。数日前の日経新聞夕刊に「自費出版」の事が出て、自費出版ネットワークのコメントも掲載されています。内容は妥当なものだと思いますが、取材されている出版社などは会員ではないようで、私としては、それらの会社のPRの片棒をかついでいるようであまりよい気持ちではありません。

『まれに見るバカ』（勢古浩爾著・洋泉社）という本を読みました。『バカにつける薬』などの本もありましたが、著者によると、氏のこの本が「バカ研究」の決定版とのこと。言葉の遊びみたいに見えるかもしれませんが、こういうまじめか冗談かわからない本を書くのは実はむずかしいことです。かなり正攻法で論じながら、そんなことにウツツを抜かずやつこそバカだ、という外野の声をあらかじめ計算して、ほんとうは遊んでいるんですよというサインをそれとなく出しておくという高等技術が要求されるからです。世間ではバカ選挙民のもとのバカ政治が進行しているようです。

二〇〇二年三月十八日（第134号）

三月半ばといえ、まだ冬のように寒いこともあるのが普通ですが、今年の春の全国的に暖かいこと。昨日は東京の桜の開花が発表されましたが、それから二三日遅れるのが普通の埼玉県でも今日はもう二分〜四分咲きという感じですね。

川沿いを散歩をしているとうっすらと汗ばんできますし、夕暮れの空をコウモリが飛びはじめ、隣ではまだシベリアに帰らないカモが泳いでいるというのに、まるで初夏のような雰囲気です。

春は嫌いではありませんが、なんとなくメランコリーになる季節でもあるようで、ここしばらくちょっと気分がふさいでいました。まだ完全に回復していないようです。皆さんの春はどうでしょうか。

二〇〇二年三月二十五日（第135号）

喜田さんの連載が終わりました。楽しい話をありがとうございました。

桜の季節が早いためか、例年のような木の下でのバカ騒ぎがすくないように思えるのは結構なことです。なんだかこんなことばかりいつているような気がします。



二〇〇二年四月八日（第136号）

新明解国語辞典によると「面識」という言葉は『会って互に顔を見知っていること』という意味だそうです。その意味では、今回の「自費出版体験」を寄稿いただいた中村さんと私は面識がありません。電子メールと電話のやりとりで一冊の本を作ったというだけの関係です。

作成した詩集にしても、印字位置が違ったり、書体の関係で「画像で印刷」されてしまったりと赤面するばかりのものでしたが、一冊の本を作っていく過程で、作者と編集者にはなんとなく意思の疎通ができていくもので、それに甘えての依頼でした。

いままでもそうでしたが、今後も、私のかかわったものだけでなく、「自分の本」を自分で出版した人たちの思いや考え、喜びを伝えていきたいと思えます。私は、自費出版がメディアとしてあるいは自己表現として、確固たる地位を築くようになることを信じています。

この号のあとに「月刊への移行」の案内を出しました。

## 最後にひとこと 「本の風景社」の1年間

映像関係の専門学校に通っていたことがありますが、どうも集団でモノを作る作業に合わないような気がして「出版をやる」と宣言してそこを中退。入った会社が四十年の歴史を持つ出版社——ここが印刷の業界紙だったもので、以後、業界団体の事務局を含めて十数年、印刷業界のなかで編集や取材をおこなう生活をすごしました。その後、パソコンでの情報処理システムの開発が面白くなって自分でやるようになってこれまた十数年。相変わらず編集や出版の仕事は好きでしたから、六年前に同じような考えを持つ人たちと自費出版ネットワークという組織を作りました。

この自費出版ネットワークの活動や編集ソフト作成の仕事はしていましたが、直接、自費出版の製作会社になることはありませんでした。出版に伴う折衝や編集・組版・印刷・製本管理などの煩わしさを知っていたからです。ところがオンデマンド出版という方法があることを知り、インターネットとパソコンによる情報処理技術を組み合わせれば、そうしたことがかなりショートカットできる可能性が出てきました。そこで、オンデマンド出版の製作と販売を引き受けてくれる㈱ブックキングという会社に申し込んでやってみることにしました。二年ほど前のことですが、実際には他の仕事に手をとられていて、本格的な活動を始めたのは昨年の夏ごろからです。

以前、自費出版ネットワークで発行していた『本の風景』という雑誌が休刊したこともあり、その意志（遺志？）を引き継ぐ意味で「本の風景社」という発行元をつくり、実質的な経営は㈱工

ヌケイ情報システムが行うことにしました。さて、そこから現在までの一年間の話です。

この出版社のPRは初めからインターネット以外に考えていませんでした。また、基本的には著者が自分で原稿を作り、電子メールで送れるようなデータになっていることを前提にしました。それ以外のことをやるとこちらの処理がパンクすると考えたからです。したがって、どれだけ連絡がくるか、はつきりいつてそんなに期待をしていませんでした。しかし私の考えていた以上に電子メールがきました。自費出版ネットワークからのリンクやブックイングからの情報でというのがありますが、まったく独自に調べてくる人も多いようです。現在のインターネット環境は「オンデマンド出版」と検索するだけで、私のサイトをはじめ、いくつもの情報が案外簡単に手に入るようになっていことにあらためて驚きます。そして、著者のユニークさやできた本のバラエティの豊かさはそれ以上のものでした。

現在まで、約三十点ほどの本を作成または作成中ですが、まず、地域的には北海道（苫小牧市）から九州（長崎県）まで、日本全国を網羅します。青森、秋田、新潟、神奈川、埼玉、千葉、茨城、大阪、京都、鳥取。東京もありますが意外に少ないです。

著者もさまざま、二十歳の大学生が自分の詩集を出したいというものから今年で八十歳になる方の記念評論集まで。職業は、主婦、会社員、ルポライター、現役の外務省官僚、大学教授、途中で自己破産してしまった人、魔界の龍と名乗る正体不明の人物――。本の内容・テーマになるとさらに多種多様です。自分史が多いのではと思っていたのですが、典型的に自分史と呼べるもの

は皆無です。詩集、小説はもちろんですが、ユニークな海外滞在記、日本文化論、仕事論、日米外交交渉の記録、歴史評論、専門技術書、インターネットから生まれたフアンタジー、生命科学、商用コンピュータの歴史、軍人だった父親の評伝、テノールの歴史やグリム兄弟の翻訳、家庭料理、アニメ論——まさにあらゆるジャンルにわたっています。作成した本のサイズ・ボリュームも七十ページの文庫本から、B5判で五百二十ページの大冊まで多種多様でした。

ここからいえることは日本中に、自分なりのテーマを持ち、その思いを表現したいという人が大勢いるということです。「前書」で、メールマガジンでの出会いを書きましたが、出版活動についてもそういう人たちと出合えるということが一番の収穫だと、これは本当に思っています。連絡はほとんど電子メールやFAXなので、声も知らないという方がかなりいます。そういう著者と連絡しあい時にはかなり厳しい議論をしたりもしましたが、ほとんどの方は結果には満足いただいているようです。私自身には編集や造本でまだまだ不満があり反省もありますが、今後インターネットを軸としたさまざまな出会いが続いていくと思っ



筑井信明

1949年、千葉県松戸市生まれの埼玉県大宮市（現さいたま市）育ち。  
埼玉県立大宮高等学校卒業。法政大学文学部地理学科（通教課程）卒業。

著書 『30億年の滅亡指令』（西田書店）  
『パソコン情報処理入門』（イグザイル）

## メールマガジン漂流記——『MyBook』の3年間

---

2002年7月30日 発行  
2007年9月8日（オンライン版発行）

著者 筑井信明

発行所 本の風景社  
〒351-0035  
埼玉県朝霞市朝志ヶ丘3-5-2-108  
URL <http://www.longview.jp/>

---

©Nobuaki Tsukui  
ISBN 4-8354-7069-9 C0095